

平成7年度

市原市内遺跡発掘調査報告

うる	い	ど	うち	の	い	せき
潤	井	戸	内	野	遺	跡
つる	まい	ね	ごろ	い	せき	
鶴	舞	子	来	遺	跡	
かみ	たか	ね	おお	さく	い	せき
上	高	根	大	作	遺	跡
にし	の	しも	だ	い	せき	
西	野	下	田	遺	跡	
みなみ	いわ	さき	なか	やま	い	せき
南	岩	崎	仲	山	遺	跡

1996・3

市原市教育委員会

序 文

房総半島のほぼ中央に位置する市原市は、古くより自然環境にめぐまれ、先人達が多く足跡を記してきました。旧石器時代から中世にいたるまで、市内には様々な遺跡が残されています。貝塚・古墳群・集落跡・寺院跡・生産遺跡・城郭等、いろいろな時代の、多種多様な遺跡が市内には存在します。遺跡の宝庫と言われるゆえんです。

また、市内では、首都圏への利便性から、大小様々な開発が各所で行われており、今後も多様な開発がすすめられることが予想されます。一方、土地に固有の文化財である、遺跡などの埋蔵文化財は開発とともに消滅する運命にあり、埋蔵文化財保護のための最低限の措置として、記録保存のための発掘調査を行っています。開発と埋蔵文化財保護との調整をいかに図るかが常に問われており、さらに、調査の迅速化等、埋蔵文化財保護のための対応をより早くすることも求められています。もちろん、保護だけでなく、保管と活用という点においてもより積極的に対応して行く必要があることは言うまでもありません。生涯学習の時代といわれる今日において、歴史に対する関心も深くなっていることを考えますと、これら諸課題に対して、より一層努力していく必要があることを痛感する次第です。

今回ここに報告するのは、国庫補助事業として実施した、埋蔵文化財の発掘調査の成果です。新聞紙上等を賑わすような成果ではありませんが、それぞれの地域における歴史の一端をうかがわせるものです。本報告が市の歴史を理解するための一助となるよう希望するとともに、多方面で活用されるよう期待しております。今後とも皆様方の御理解と御協力をお願いいたします。

最後に、今回の調査を実施するにあたり御指導・御協力を賜りました、文化庁・千葉県教育委員会・財団法人市原市文化財センターならびに関係諸機関に対しまして、心より感謝の意を表する次第であります。

平成 8 年 3 月


市原市教育委員会
教育長 大 野 皎

例 言

- 1 本書は国庫および県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査の概要の報告書である。
- 2 発掘調査及び整理事業は文化庁の国庫補助事業として助成金を受けた市原市教育委員会の依頼により、財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書印刷刊行については市原市教育委員会で行った。
- 3 今年度実施した発掘調査は下記のとおりである。
 - (1) 潤井戸内野遺跡（センター調査コード207）市原市潤井戸字内野1355-1、1359-1、1359-5
調 査 給油所建設に伴う確認調査で、1,515㎡のうち152㎡を対象に行った。
調査期間 平成7年7月10日～平成7年7月18日
 - (2) 鶴舞子来遺跡（センター調査コード208）市原市鶴舞字子来661-1
調 査 移動通信基地局建設に伴う確認調査で、520㎡のうち52㎡を対象に行った。
調査期間 平成7年7月19日～平成7年7月27日
 - (3) 上高根大作遺跡（センター調査コード209）市原市上高根字大作1515-1
調 査 仮設道路建設に伴う確認調査で、280㎡のうち30㎡を対象に行った。
調査期間 平成7年7月28日～平成7年8月3日
 - (4) 西野下田遺跡（センター調査コード211）
調 査 ドライブイン建設に伴う確認調査で、1,280㎡のうち128㎡を対象に行った。
調査期間 平成7年9月11日～平成7年9月22日
 - (5) 南岩崎仲山遺跡（センター調査コード217）
調 査 墓地造成に伴う確認調査で、1,600㎡のうち160㎡を対象に行った。
調査期間 平成7年11月21日～平成7年12月14日
 - (6) 市原条里制遺跡（八幡砂田地区）（センター調査コード218）
調 査 ガソリンスタンド建設に伴う確認調査で、1,588㎡のうち429㎡を対象に行った。
なお、整理作業、報告書作成は次年度以降を予定。
調査期間 平成8年1月11日～平成8年2月5日
- 4 現地調査ならびに整理作業・原稿執筆は、櫻井敦史が担当した。
- 5 本書に使用した地形図は、市原市発行の1：25,000地形図および1：2,500地形図である。
- 6 現地調査の記録に使用した「北」はすべて「磁北」である。
- 7 調査区の設定ならびに遺構の記録などについて、公共座標は用いていない。

凡 例

- 1 挿図における縮尺は、一部の縄文土器を除いて1／3を基準とした。
- 2 石器実測図中の記号の意味は次のとおりである。

摩耗痕	←●→	摩耗強	←●●→
敲打痕	←○→	敲打強	←○○→
敲打面			

本文目次

序文

例言・凡例

遺跡の立地と環境（潤井戸内野遺跡・鶴舞子来遺跡・上高根大作遺跡・

西野下田遺跡・南岩崎仲山遺跡）	1
I 潤井戸内野遺跡	6
II 鶴舞子来遺跡	8
III 上高根大作遺跡	12
IV 西野下田遺跡	16
V 南岩崎仲山遺跡	18

挿図目次

第1図 調査遺跡群位置図	3
第2図 潤井戸内野遺跡位置図	4
第3図 鶴舞子来遺跡位置図	4
第4図 西野下田遺跡位置図	5
第5図 南岩崎仲山遺跡・上高根大作遺跡位置図	5
第6図 潤井戸内野遺跡周辺地形図	6
第7図 潤井戸内野遺跡全体図及び出土遺物	7
第8図 鶴舞子来遺跡周辺地形図	8
第9図 鶴舞子来遺跡全体図及び出土遺物	9
第10図 鶴舞子来遺跡出土遺物	10
第11図 鶴舞子来遺跡出土遺物	11
第12図 上高根大作遺跡周辺地形図	12
第13図 上高根大作遺跡全体図及び出土遺物	13
第14図 上高根大作遺跡出土遺物	14
第15図 上高根大作遺跡出土遺物	15
第16図 西野下田遺跡周辺地形図	16
第17図 西野下田遺跡遺構配置図・出土遺物実測図	17
第18図 南岩崎仲山遺跡周辺地形図・報恩寺（南岩崎砦）縄張り図	18
第19図 南岩崎仲山遺跡遺構配置図	19

遺跡の立地と環境

(1) 潤井戸内野遺跡

遺跡は村田川中流域南岸に面した、標高約18mのやや奥まった緩やかな河岸段丘上に位置する。段丘の東西は村田川支流によって深く谷が開析され、舌状となる。それぞれ西側は久々津、東側は潤井戸の集落が展開している。

隣接遺跡としては、同段丘上に潤井戸西山遺跡・草刈尾梨遺跡が知られる。それぞれ昭和59年、平成2年に財団法人市原市文化財センターにより一部調査され、弥生中期の環濠や、古墳時代前期から奈良時代にかけての住居跡・掘立柱建物跡・四脚門跡・柵列跡などが検出された。四脚門跡・柵列跡・一部の掘立柱建物跡については、和泉期における豪族居館遺構の可能性も指摘されている⁽¹⁾。縄文時代については、西山において陥し穴状遺構・土壇などが報告されており、内野遺跡と類似した様相を呈する⁽²⁾。しかし今回の調査で弥生時代以降の遺構は全く検出されず、西山・尾梨遺跡との関連性は掴めない。また、西側の神崎川開析谷を見下ろす形で久々津古墳群が存在するため、遺跡周辺が古墳時代終末期段階にかけ墓域として機能した可能性も指摘しうるが、方形周溝状遺構などの関連遺構は調査区において認められなかった。

(2) 鶴舞子来遺跡

遺跡は養老川支流の平蔵川を南に見下ろす標高約105mの台地上に位置する。この台地は通称鶴舞台地と呼ばれている。北側を養老川支流の石川川に樹枝状に開析され、馬の背状の地形を呈しながら、牛久の養老川氾濫平野に面した江子田の台地へとなだらかに接続する。鶴舞台地はある程度平坦で現在集落が営まれているが、先述の平蔵川氾濫平野との比高差は大きく、急斜面が続いている。

台地上には縄文中・後期の土器を中心に土師器・須恵器などが散布しており、縄文時代中・後期集落の存在が窺われる。今回の調査においては、調査区の大半が下堰に続く緩やかな埋没谷であり、集落の確認はできなかった。しかし調査区南西端より縄文中期の小竪穴状遺構が検出されたため、これより西側から平蔵川を望む斜面までの地区に縄文集落があり、その外辺を調査したものと思われる。調査区遺物包含層中から出土した遺物は、集落より流れ込んだ可能性が強い。なお、矢田・池和田など、養老川と平蔵川が合流する氾濫平野付近一帯は中世的郷村が展開していたことが文献に見え⁽³⁾、鶴舞台地麓にも中世には集落が存在した可能性が強い。台地から平蔵川氾濫平野の舌状に突出した丘陵は、戦国期に城郭として整備され、池和田城として著名である。平蔵川に面した微高地や台地麓に成長してきたと思われる中世村落も、池和田城普請と共に政治的・経済的影響を受け変革したものと考えられよう。なお、幕末においては子来遺跡北側一帯に鶴舞藩庁がおかれ、鶴舞城と呼ばれている。現在の集落の基礎もこの段階で整備されたものと思われる。

(3) 上高根大作遺跡

遺跡は、養老川中流域西岸の氾濫平野および馬立の自然堤防に面した丘陵上に位置する。標高は調査区周辺が約94m、やや北東寄りが高位で、約95mを測る。小谷により樹枝状に開析された尾根の頂部に立地するため、平坦面は狭長である。これを更に横断する形で調査を行った。調査範囲が細長くなったため、不明な点も多々あるが、縄文時代中期後葉の住居跡・小竪穴状遺構などを確

認した。確認面積の関係上、明確な判断はしにくいだが、集落を構成するものと捉えてよいと思われる。当丘陵のほか、谷を隔てた南岩崎の台地上にも縄文土器の散布が認められ、近辺にも縄文の集落が散在していた可能性が強い。

(4) 西野下田遺跡

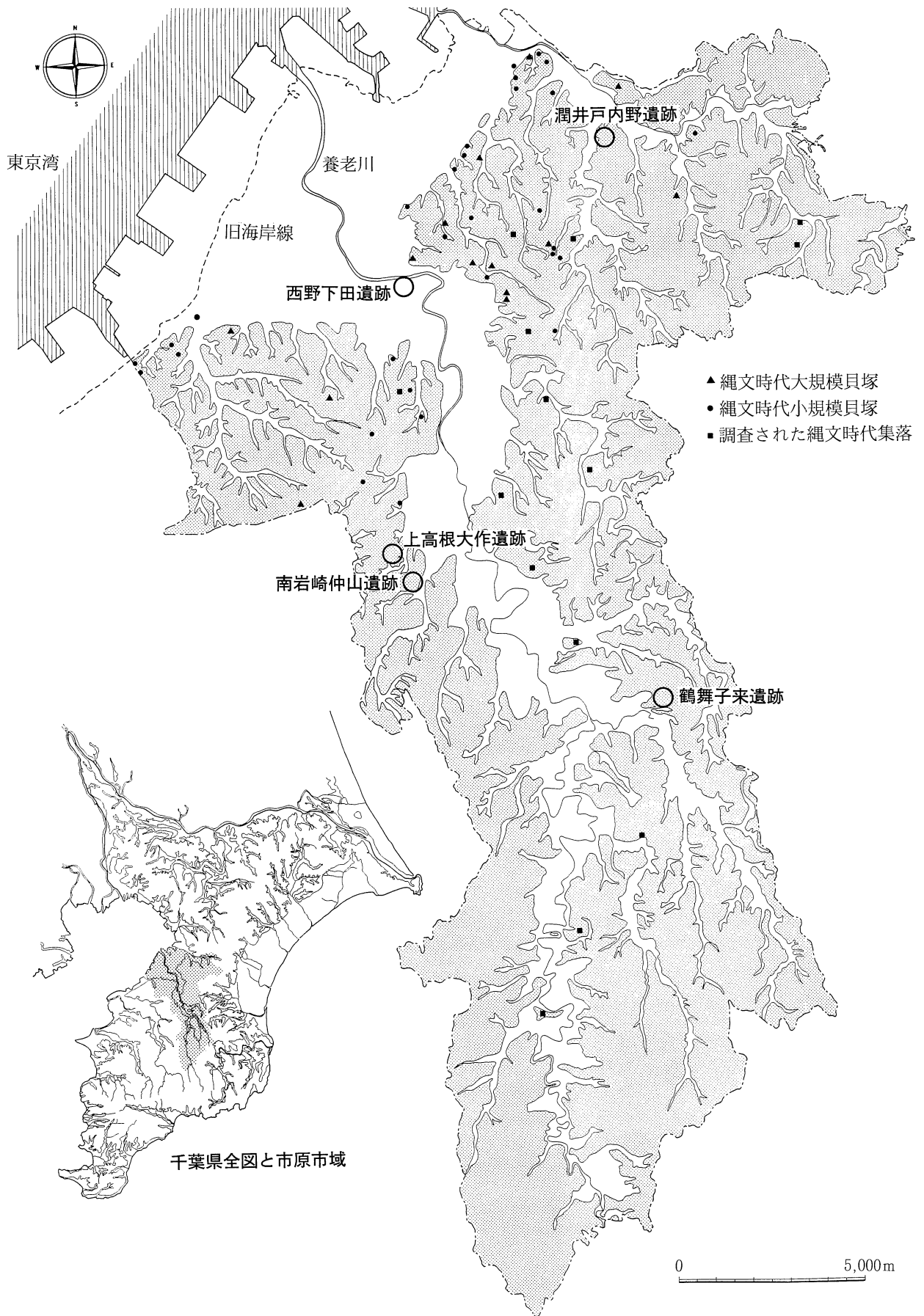
遺跡は緩やかに蛇行する養老川南岸の氾濫平野に面し、微高地を形成する自然堤防上に位置する。海上郡衙関連遺跡として周知の西野遺跡群に包括される。西方約500mに位置する微高地は小折と呼ばれ、「小折」が「郡」に通じることから海上郡衙推定地とされている。更に養老川対岸北西の微高地には、国府推定地として著名な村上遺跡群が存在する。昭和59年、隣接地の西野遺跡においては、財団法人千葉県文化財センターにより発掘調査が実施されている⁽⁴⁾。西野遺跡からは竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・溝・土壌などが検出された。主体的時期は奈良・平安時代とされている。住居跡については古墳時代と報告され、今回確認した下田遺跡の遺構群と時期的に近いと考えられる。両遺跡とも調査範囲が限定されており、集落や墓域を明瞭に構成するか否か、規模的事項については判断できない。しかし郡衙成立以前の生活跡を示す遺跡として史料的に重要といえる。なお、西野遺跡で最も検出された奈良・平安期の遺構は今回確認されなかった。調査区北半分は近年切り土整地を受けているため、掘り込みの浅い遺構については湮滅の可能性もある。

(5) 南岩崎仲山遺跡

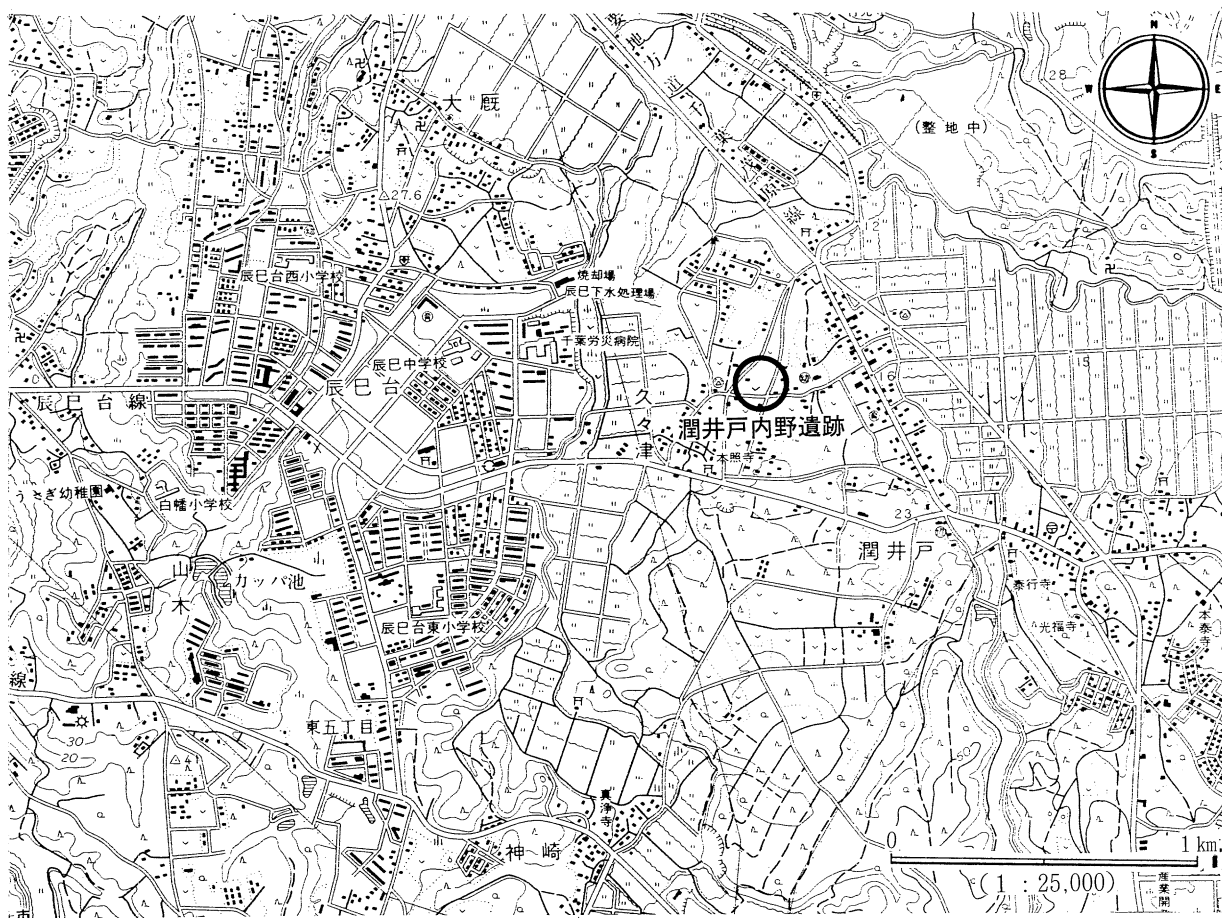
遺跡は、養老川中流域西岸の氾濫平野および、西国吉の丘陵から馬立方面に伸びる自然堤防を見下ろす台地上に位置する。養老川支流の戸田川により、先述した西国吉の丘陵とは区分されている。台地上は平坦で広いが、標高約65mで東側全体が急激な斜面となる。この戸田川に面した台地東側は、前方後円墳2基を含む古墳群が認められ、報恩寺古墳群として知られている。今回の調査で検出された7世紀の方形周溝状遺構は上記の古墳群と系譜的繋がりが想定される。墓域が古墳時代終末期段階において、古墳群のある台地東側より中央に移動し、方形周溝状遺構群を形成したものと考えられよう。また、同台地上の報恩寺周辺では弥生後期の土器が散布しているが、仲山遺跡調査区から弥生時代の遺構は検出されていない。新しい遺構としては北宋銭を伴う中世の溝状遺構がある。報恩寺および東側斜面地が範囲とされる「南岩崎砦」⁽⁵⁾に関連する遺構とも思われる。しかしこの一帯を中世城郭跡と見做す可能性は全く無しとしないが、積極的根拠に欠ける。曹洞宗報恩寺の創立が天文16(1547)年と伝えられていることもあり、中・近世寺院及び境内墓所に関わる遺構と捉えたい。なお、現在の境内墓地は、景観的起源を17世紀中葉頃に求められる。中世の石塔については、伊豆石製小型五輪塔の水輪部が地表面において1基のみ確認できる。

注 釈

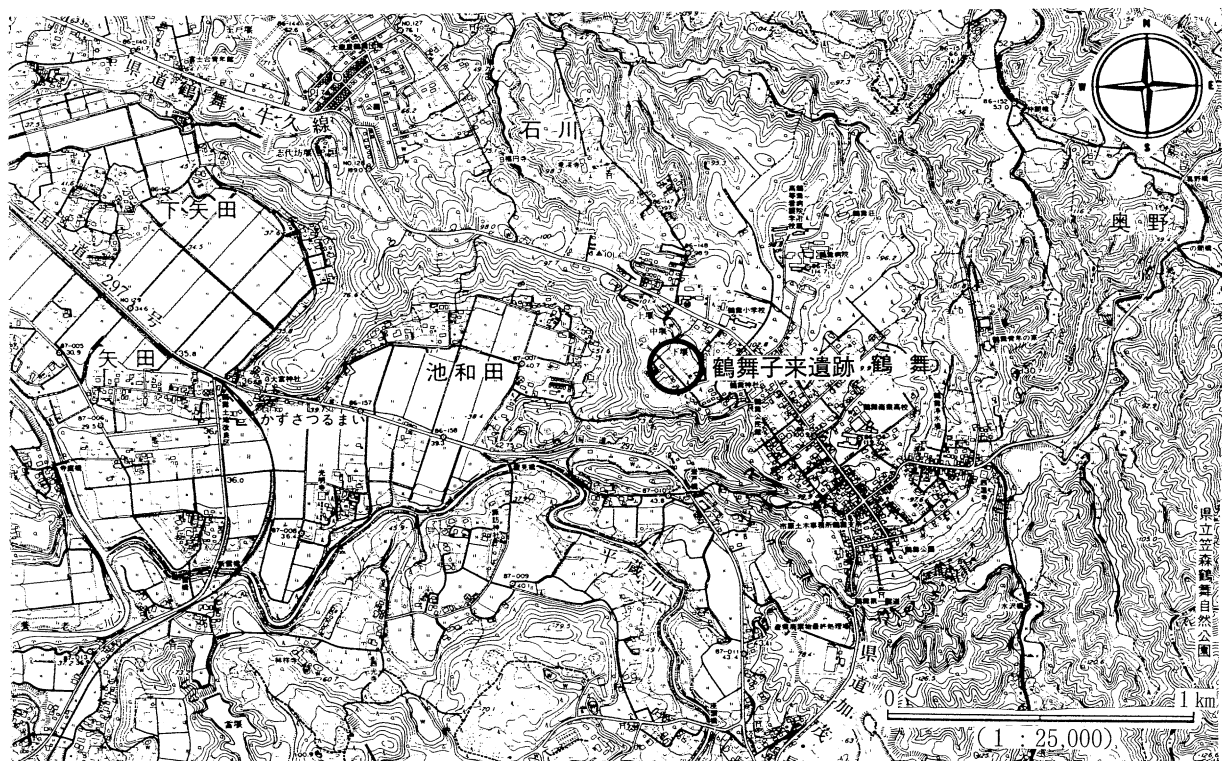
- (1) 『草刈尾梨遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第46集、平成4年。
- (2) 『潤井戸西山遺跡』(財)市原市文化財センター、昭和61年。
- (3) 文治2(1186)年正月21日源頼朝下文案(烟田文書、市原市史資料集中編101号)をはじめ、中世前半期を中心に史料が認められる。なお、同文書により、矢田・池和田近辺が上総権介(広常)娘に安堵されていることがわかるが、広常誅殺後の一族に対する本宅安堵的な性質を考慮すると、当地がわりと良好な農業生産地帯であった推測が立つ。
- (4) 『市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第161集、平成元年。
- (5) 『日本城郭大系6千葉・神奈川』新人物往来社、昭和48年。



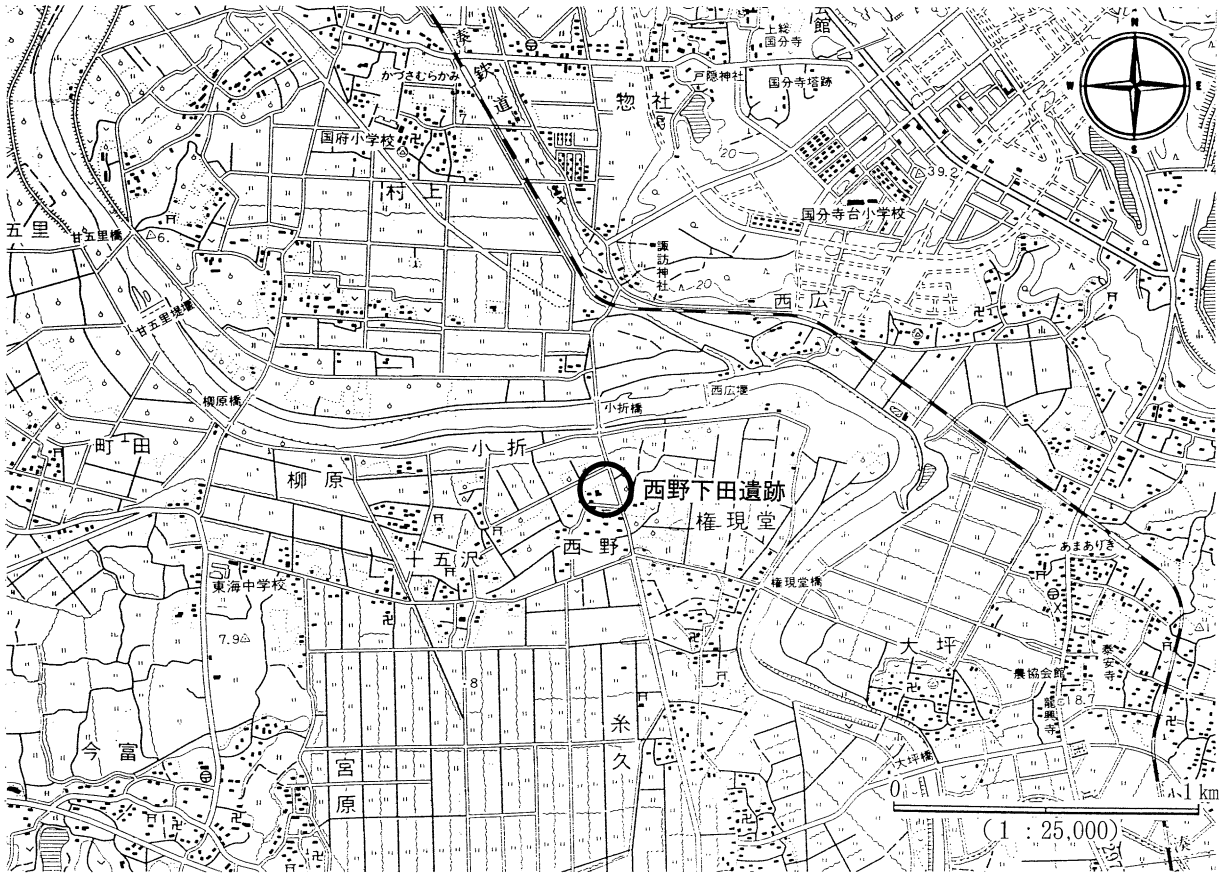
第1図 調査遺跡群位置図（忍澤成視「市原市能満上小貝塚」文化財センター報告書第55集に加筆）



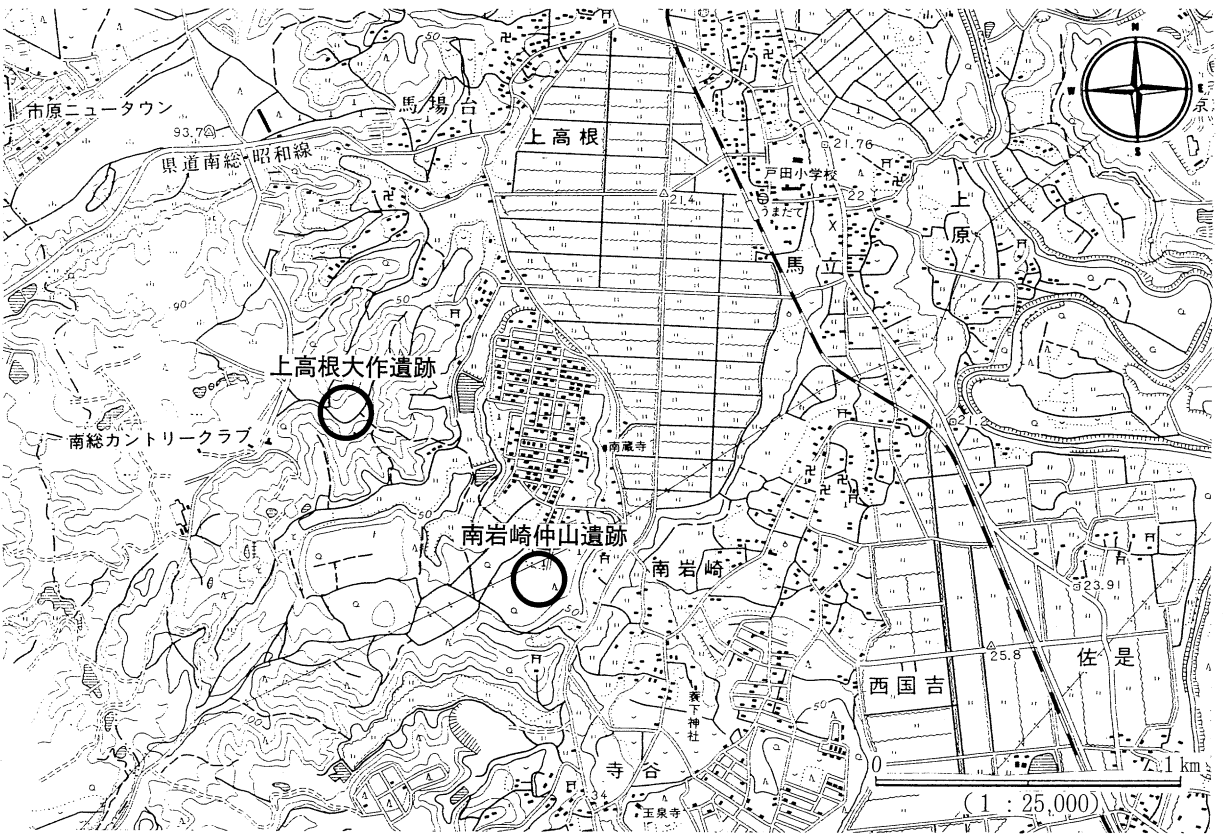
第2図 潤井戸内野遺跡位置図



第3図 鶴舞子来遺跡位置図



第4図 西野下田遺跡位置図



第5図 南岩崎仲山遺跡・上高根大作遺跡位置図

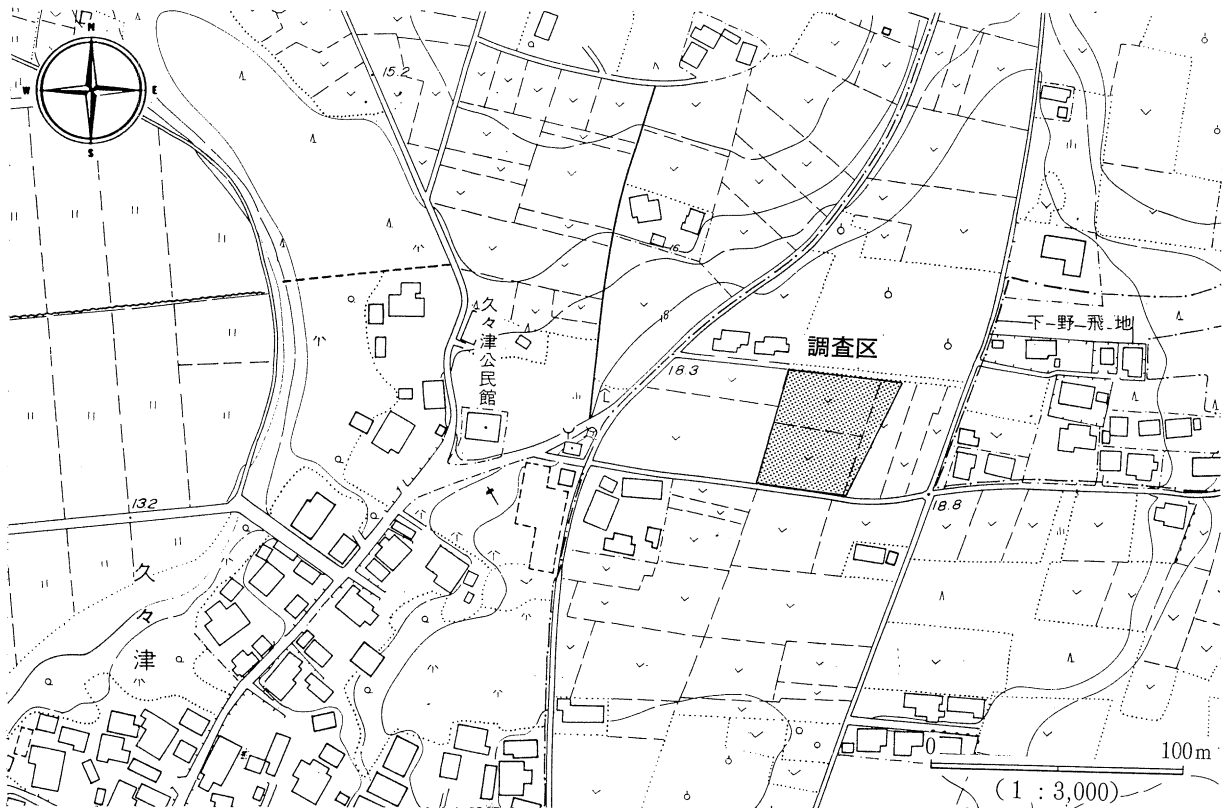
I 潤井戸内野遺跡

(1) 遺 構

調査によって縄文時代の陥し穴状遺構 2 基が検出された。このうち 1 号遺構は、底部に直列する 2 本のピットを伴う。長方形のプランで、確認面より深さ約 1 m を測る。2 号遺構は底部に施設を施さず、幅も狭い。上部は幅広で断面が漏斗状を呈する。長方形プランで、確認面より深さ約 1.2 m を測る。堆積土層は 1 号・2 号遺構とも下部に褐色味強い土、上部に有機質性の強い土が認められる。周辺に持ち上げたロームの山が、急速に遺構内へ落下したためと思われる。伴う遺物は検出されなかったが、付近のトレンチより勝坂式期の土器が出土しているため、縄文中期の遺構と考えられる。なお、本遺跡は太平洋戦争末期、陸軍により造成を受けており、検出された 1 号・2 号以外の遺構は全てこの時の塹壕および対空砲火陣地・進入通路である。

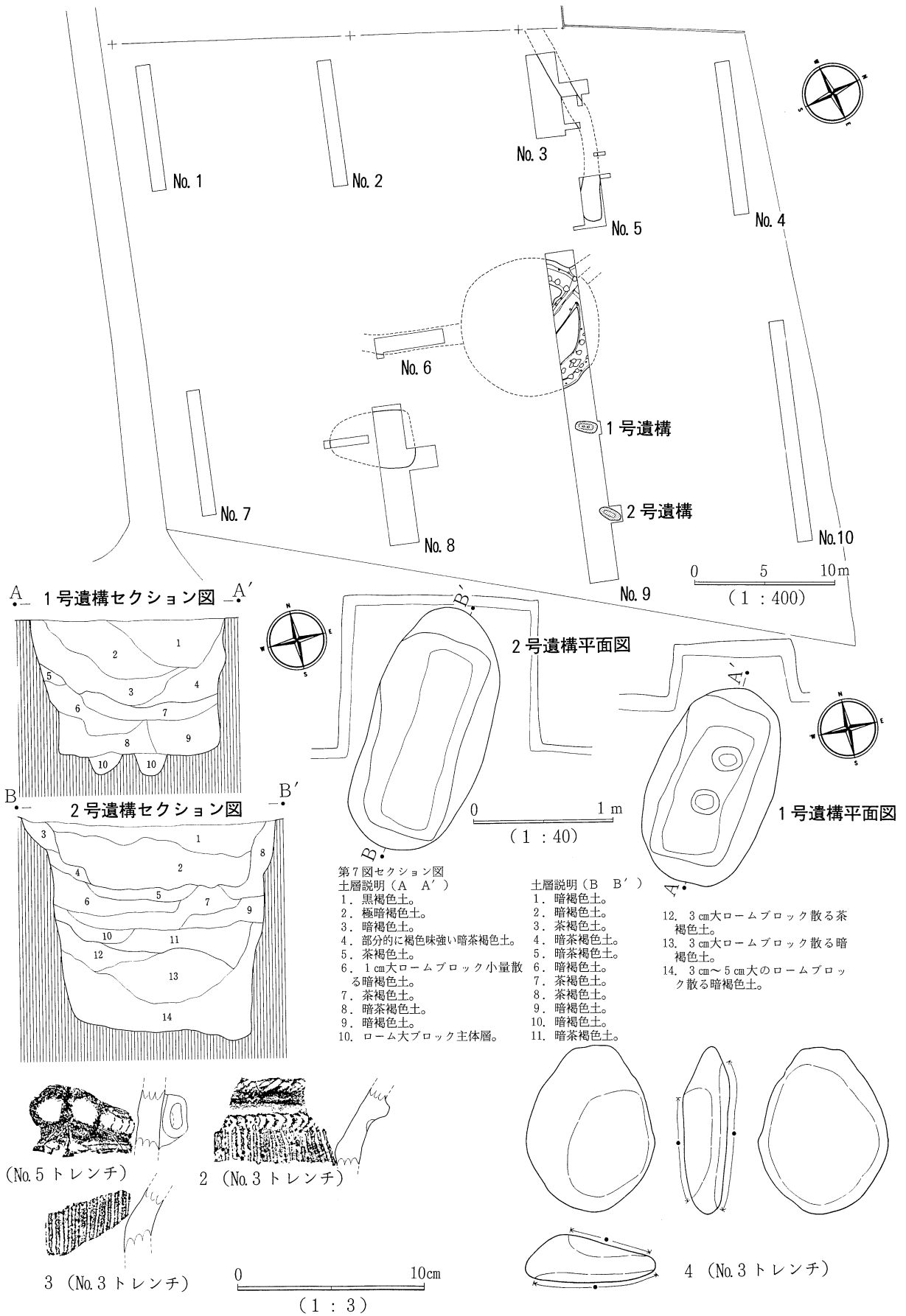
(2) 遺 物

遺物は少数の縄文土器片や磨石が出土したものの、全て遺構に伴わず、耕作攪乱表土中より検出された。土器はほとんどが縄文時代中期であるが、いずれも小片であるため、状態のよいもののみ図示した。1・2・3とも勝坂式期の範疇に入る。磨石は平たい自然石（砂岩）の両面を使用したようで、ゆるい研磨痕が残る。全体に遺物量は希少で、集落などの生活遺跡が付近にあるとは考えがたい。古墳時代終末期の墓域などに包括された可能性も指摘しうるが、関連の遺構・遺物は検出されなかった。なお、図示しなかったが、No.8 トレンチ中の塹壕より戦時中の骨製歯ブラシ・スコップ片・高射砲弾片などが出土した。



第 6 図 潤井戸内野遺跡周辺地形図

I 潤井戸内野遺跡



第7図 潤井戸内野遺跡全体図及び出土遺物

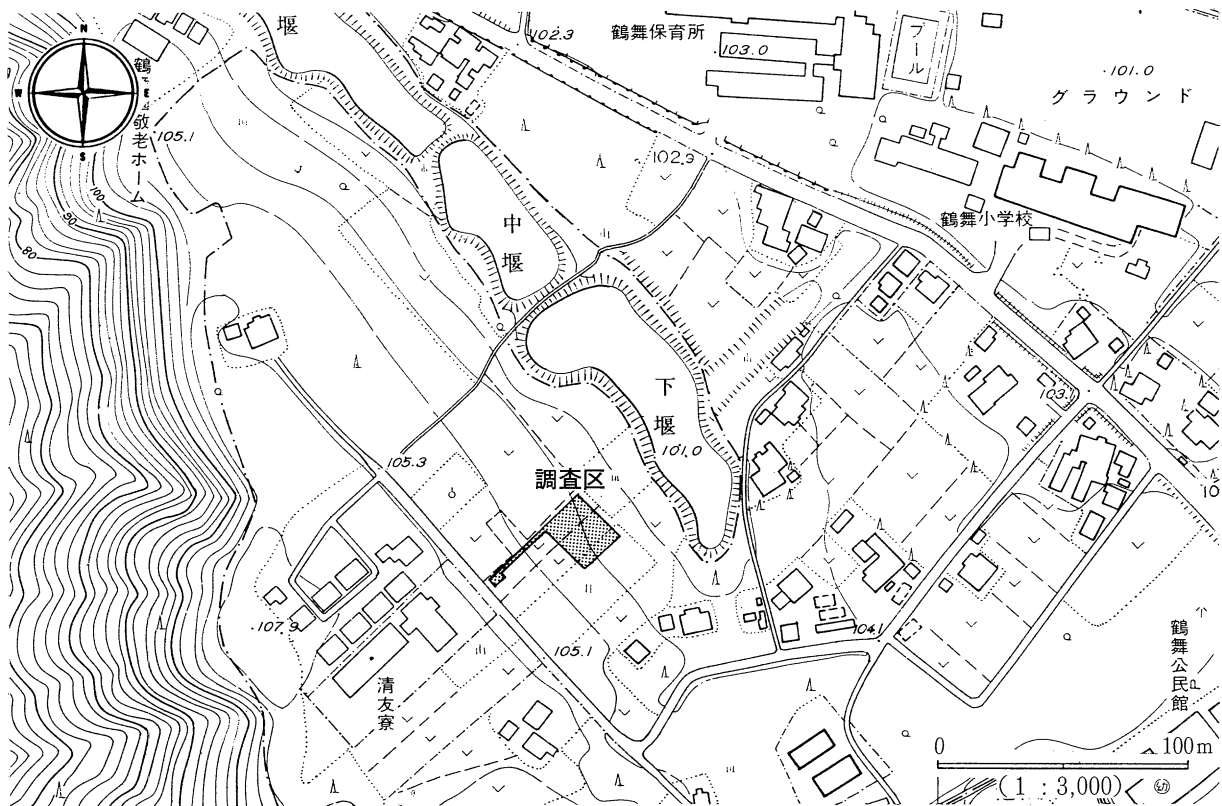
II 鶴舞子来遺跡

(1) 遺 構

調査の結果、縄文時代中期後半の小竪穴状遺構が1基検出された。円形のプランを有し、底面にピットを伴う。これらに対し柱痕跡は確認しえなかった。北側のピットについては貯蔵穴の可能性はある。遺構全体の堆積状況を見ると、中層以下はロームブロックを含んだ褐色土中心で、人為的埋め戻しと判断できる。窪み状に残った上層は有機質土の自然堆積により埋没している。遺物は上・中・間層付近に浮いた状態で纏って出土し、遺構下層および底面には認められなかった。No.1～No.8トレンチにおいて遺構は検出されなかったが、IIc層中（第10図土層説明参照）より全体的に遺物のみ出土している。No.9トレンチから北東に向かうと地山ソフトロームまでの深さが次第に増し、谷を形成する。先述の遺物は、新期富士テフラ堆積以前に西側から流入したものである。このため調査区南西方面に縄文時代中期から後期にかけての集落が存在した可能性が強い。

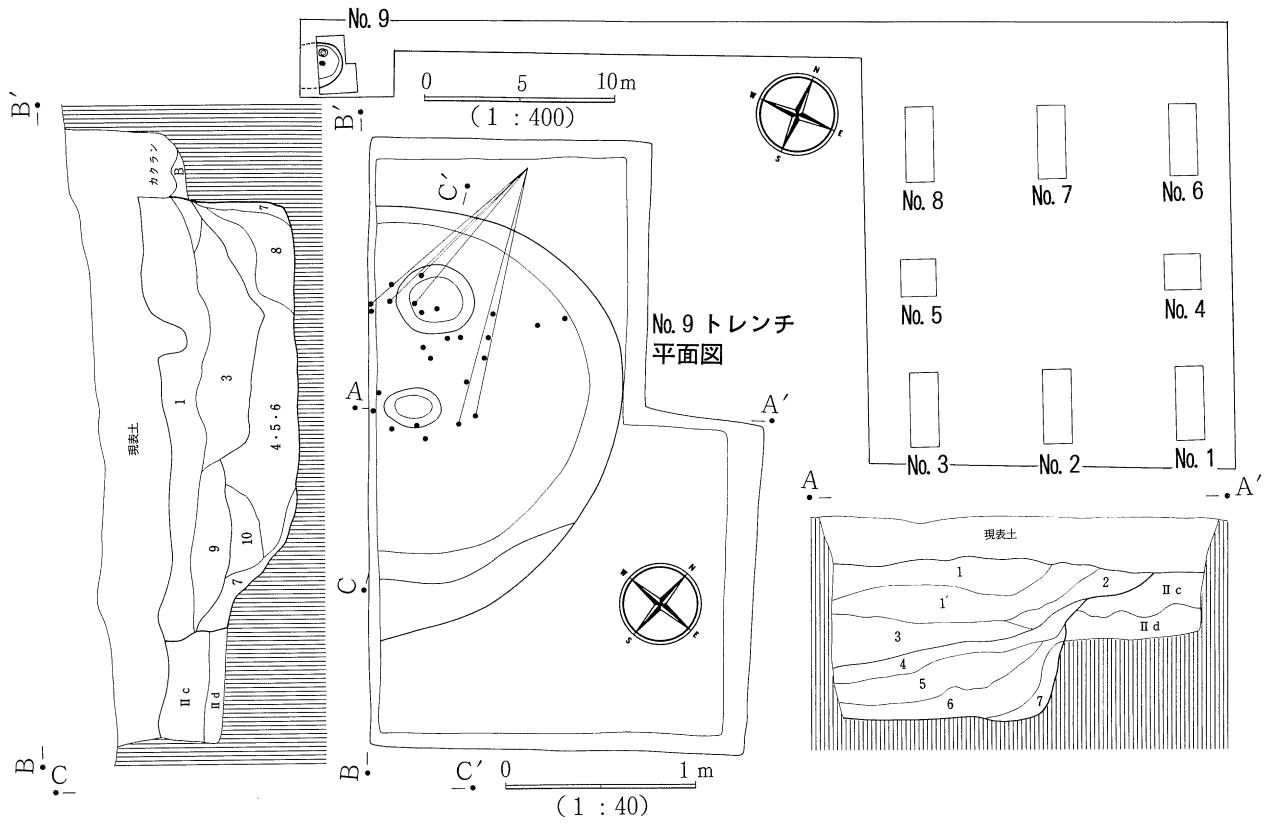
(2) 遺 物

縄文時代中期後半から後期全般におよぶ土器が出土した。石器は全て磨石、叩石である。土器の出土はNo.9トレンチ・小竪穴状遺構内に集中した。遺構内からは加曾利E3・E4式期および堀之内内式期、加曾利B式期にかけての土器が認められる。出土量は加曾利E3・E4式期が最も多く、接合関係もあるため、時期的に遺構に伴う可能性が強い。ただし調査区全体では縄文後期の土器が多く、中期の土器を量的に上回る。加曾利B式期がピークで、粗製土器を多く伴う。安行II式期の段階で著しく減少、縄文晩期の遺物は全く検出されなかった。



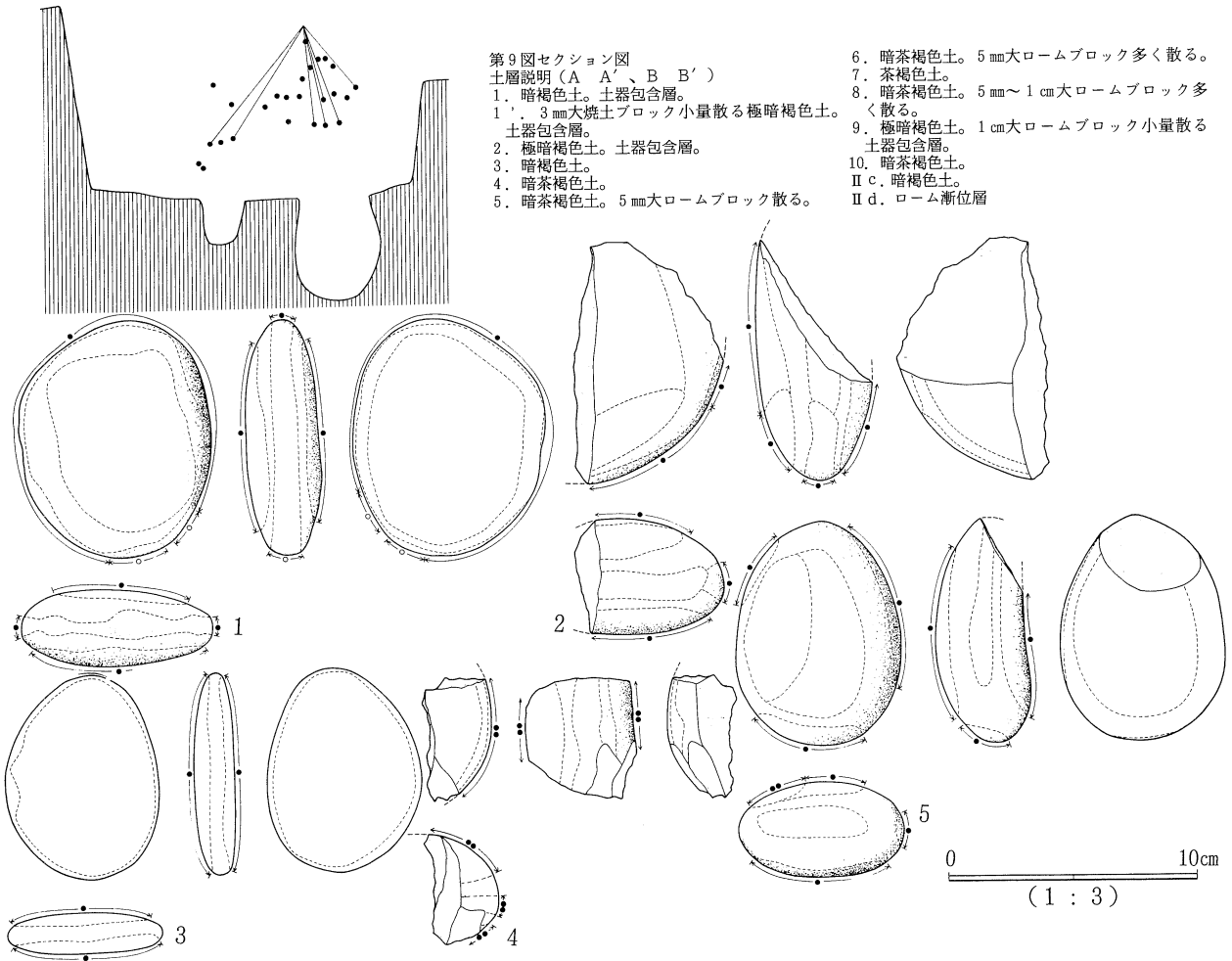
第8図 鶴舞子来遺跡周辺地形図

II 鶴舞子来遺跡



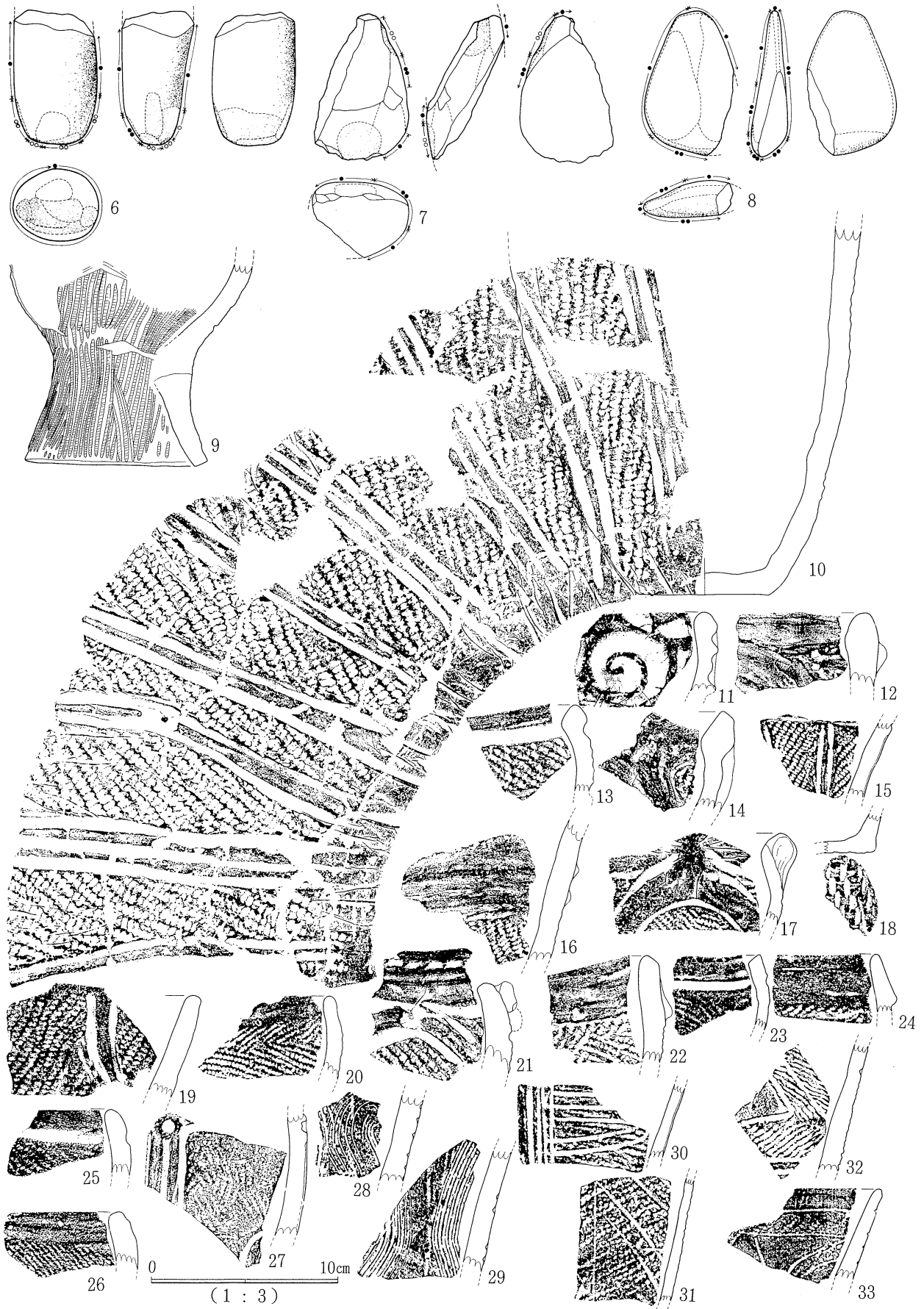
第9図セクション図
土層説明 (A A', B B')

1. 暗褐色土。土器包含層。
- 1'. 3mm大焼土ブロック少量散る極暗褐色土。土器包含層。
2. 極暗褐色土。土器包含層。
3. 暗褐色土。
4. 暗茶褐色土。
5. 暗茶褐色土。5mm大ロームブロック散る。
6. 暗茶褐色土。5mm大ロームブロック多く散る。
7. 茶褐色土。
8. 暗茶褐色土。5mm~1cm大ロームブロック多く散る。
9. 極暗褐色土。1cm大ロームブロック少量散る土器包含層。
10. 暗茶褐色土。
- II c. 暗褐色土。
- II d. ローム漸位層

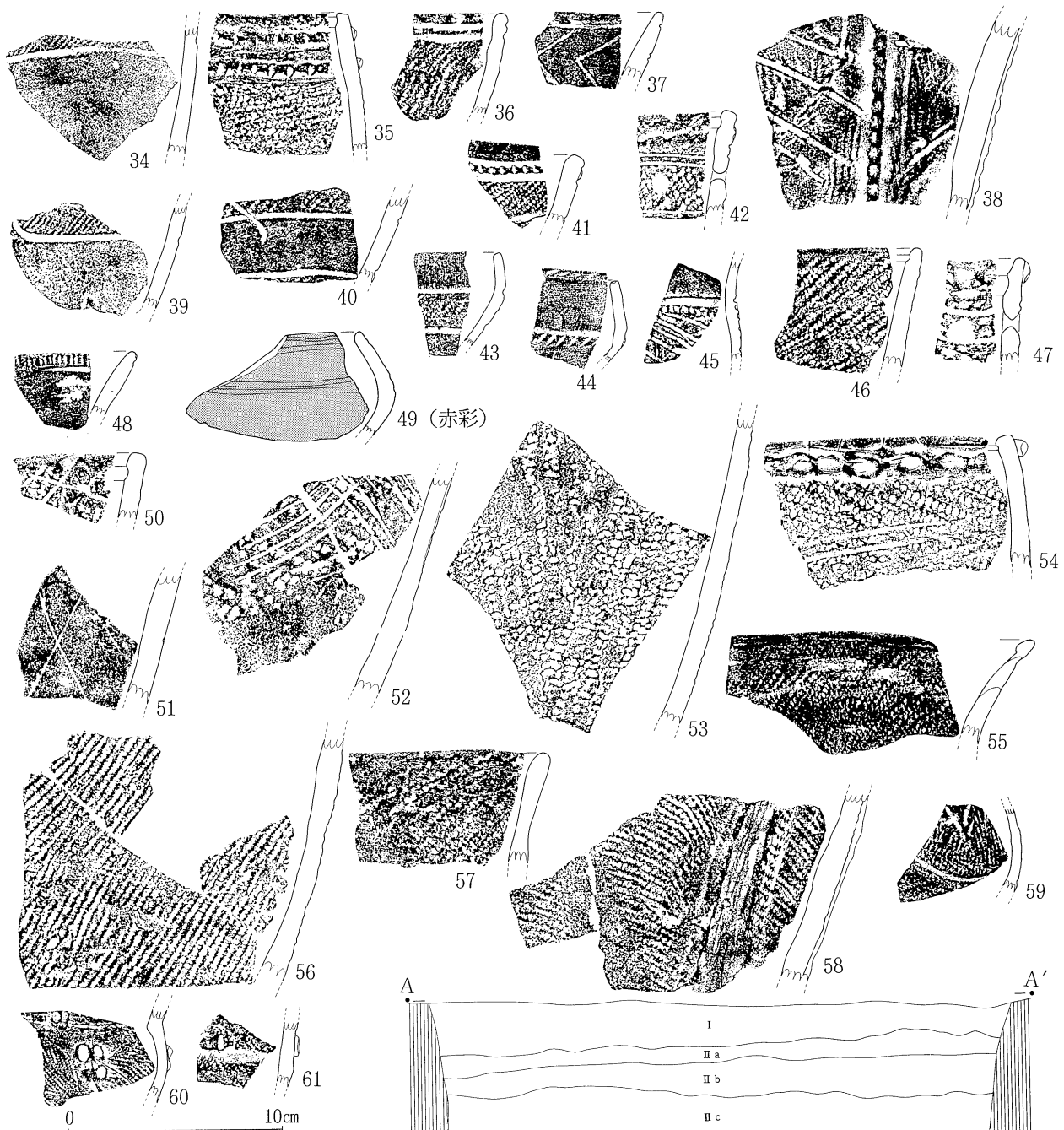


第9図 鶴舞子来遺跡全体図及び出土遺物

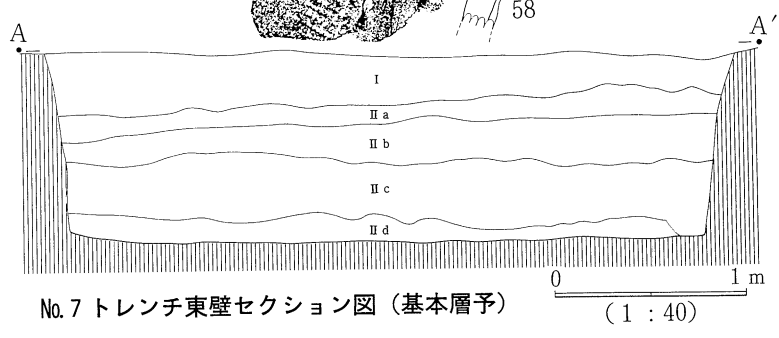
II 鶴舞子来遺跡



第10図 鶴舞子来遺跡出土遺物



第11図セクション図
土層説明
I. 暗褐色、現表土。
II a. 暗褐色土。
II b. 暗茶褐色土。新期富士テフラ。
II c. 極暗褐色土。
II d. ローム漸位層。



No.1 トレンチ (41、49、60)、No.2 トレンチ (25、26)、No.3 トレンチ (40、59、61)、No.4 トレンチ (1、22)、No.6 トレンチ (95)、
No.7 トレンチ (50)、No.8 トレンチ (8、5)、No.9 トレンチ (2、3、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、20、21、23、
24、27、28、29、30、31、32、33、34、35、36、39、42、43、46、47、48、51、52、53、54、56、58)、表土採集 (19、37、38、44、55、57)

第11図 鶴舞子来遺跡出土遺物

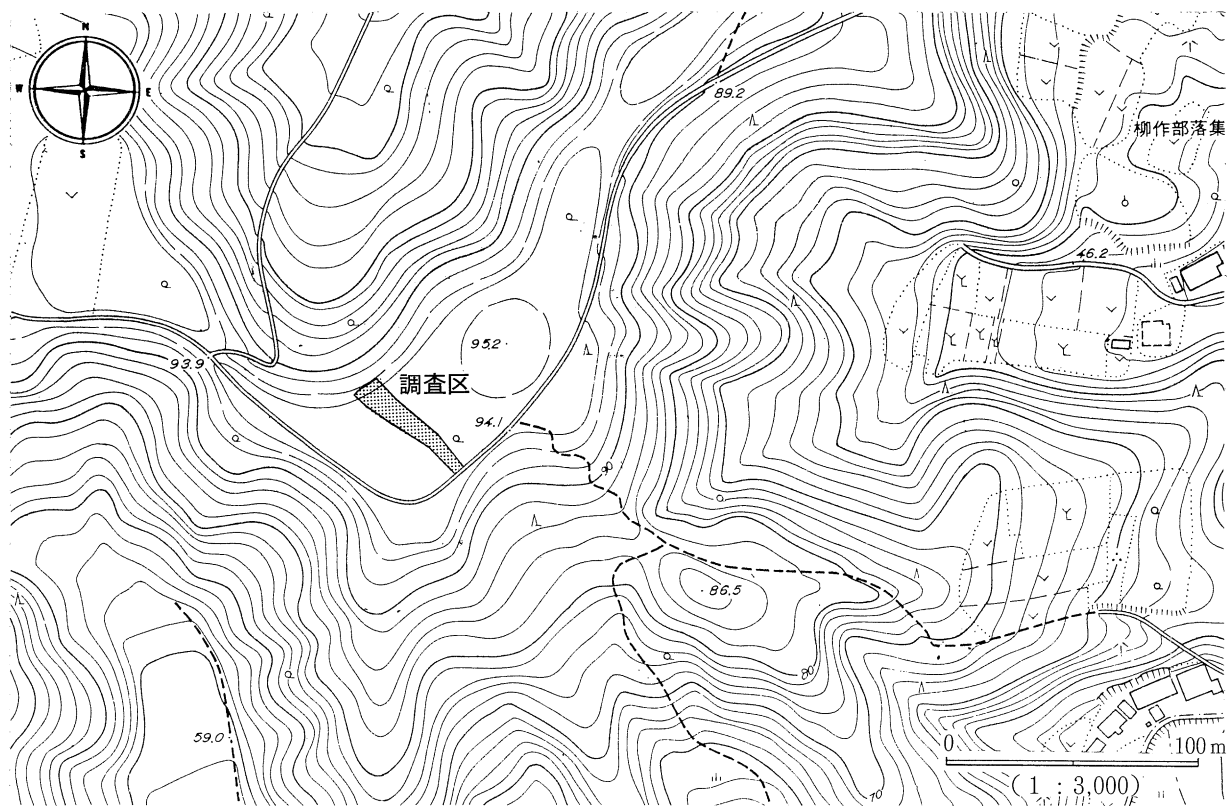
Ⅲ 上高根大作遺跡

(1) 遺 構

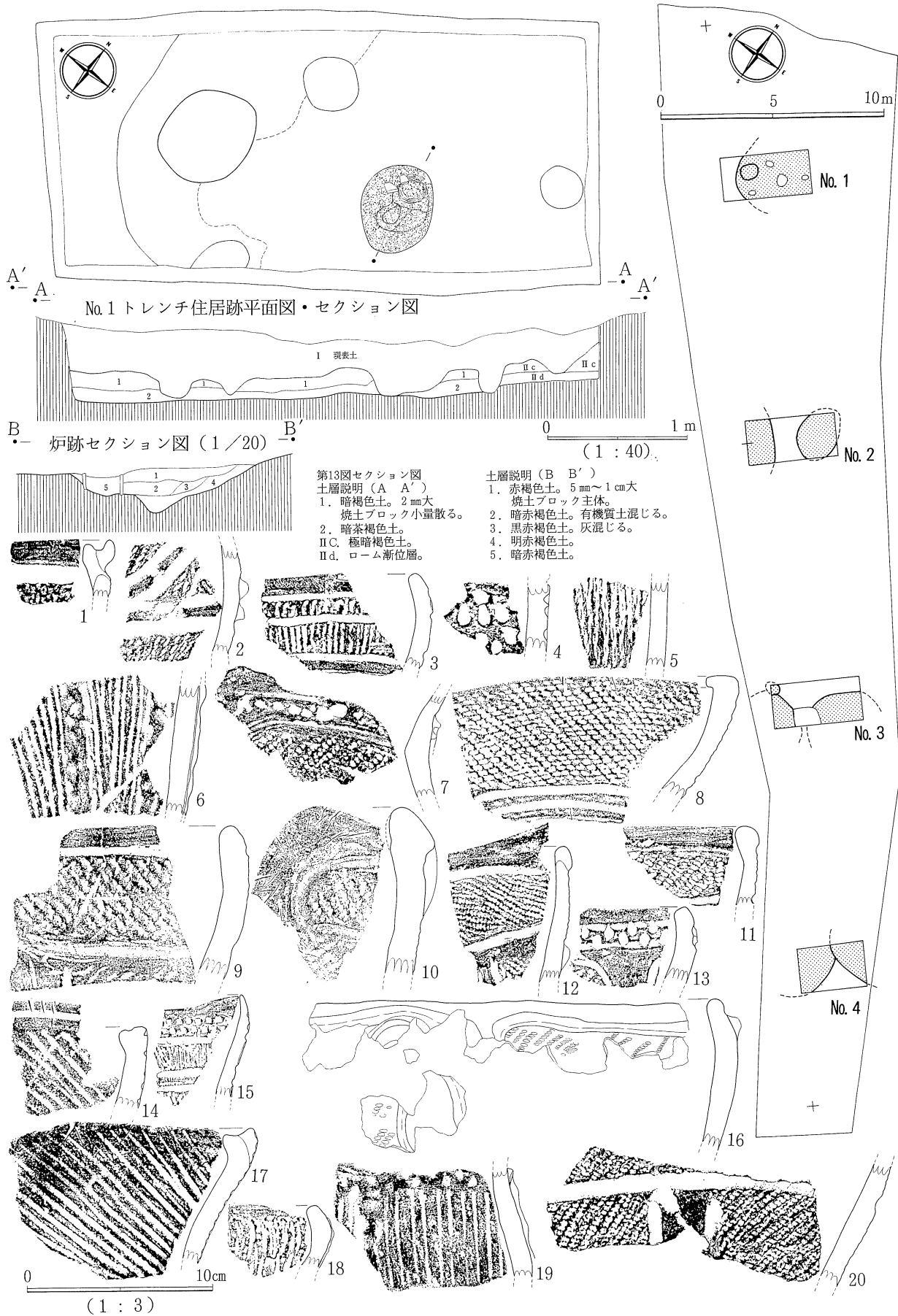
調査の結果、縄文時代中期後葉の住居跡5軒、小竪穴状遺構2基、時期不明の土坑2基が確認された。No.1トレンチ内住居跡は加曽利E2式期で、他の遺構より古い。掘り込みも浅く、現表土を除去した段階で床面が露出する状態であった。保存状態不良のためプランは不明瞭だが、概ね円形である。遺構中央からやや南よりに埋甕炉を有する。3本の柱穴についてはプラン確認のみ行なった。時期不明の土坑により床硬質面の一部が切られている。No.2トレンチ内住居跡（南西側）は加曽利E4式期、小竪穴状遺構（北東側）は加曽利E3式期の遺構である。No.3トレンチ内住居跡（東側）・小竪穴状遺構（南西側）およびNo.4トレンチ内住居跡については時期不明であるが、加曽利E3からE4式期全般にかけての遺構と考えられる。なお、No.4トレンチ内住居跡（西側）は覆土中に多量の焼土が認めれる。

(2) 遺 物

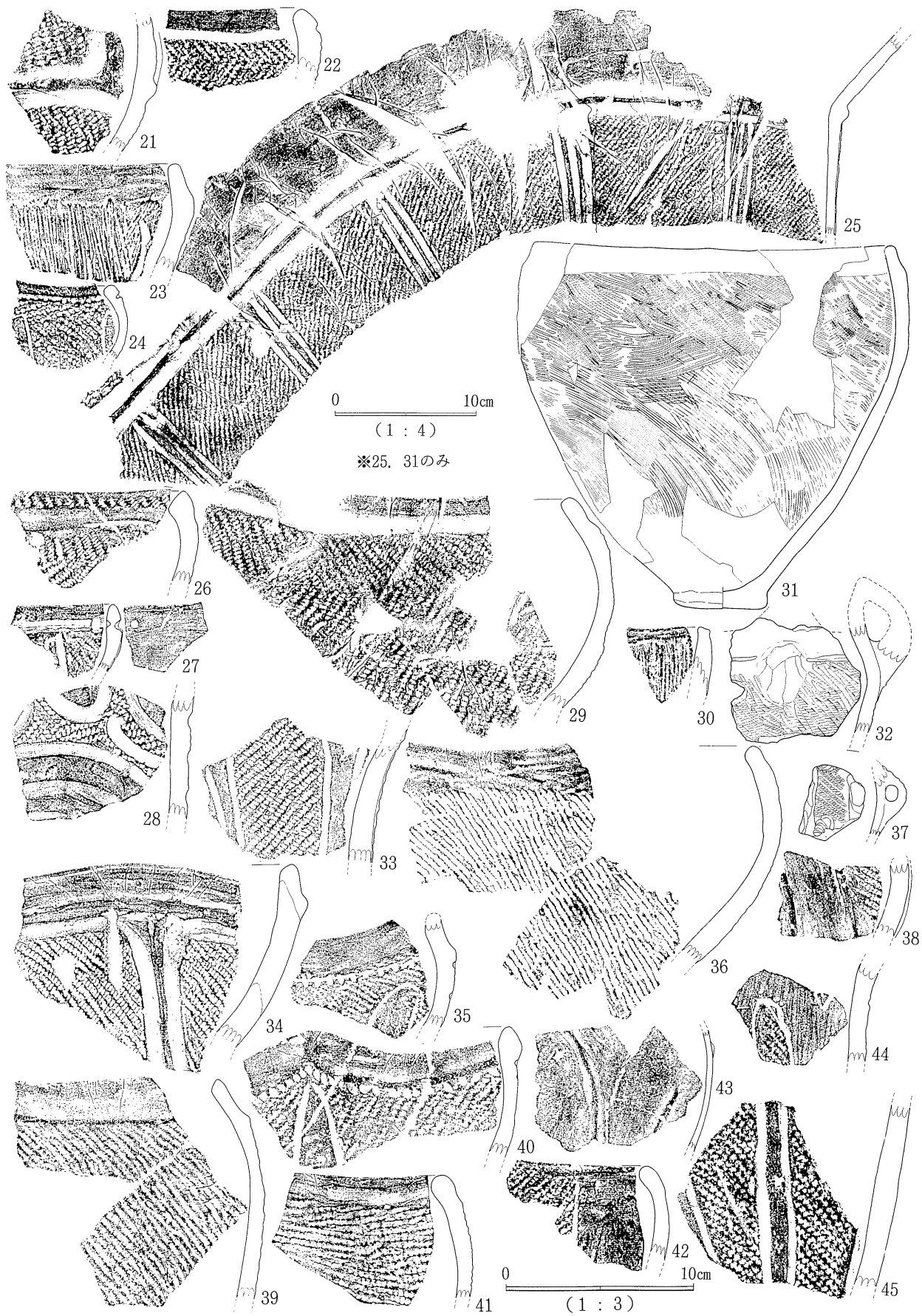
多くがNo.1・No.2トレンチ内から出土している。量的には加曽利E4・E3式の順である。いずれも深鉢が組成の主体を占めるが、E4については粗製のものが多い。No.1トレンチ内住居跡に伴う埋甕炉転用の遺物は、頸部に無文帯を有するE2の深鉢であり、他の遺物群より古い。このため遺構はE2期とした。石器類は全て磨石・叩石・浮子が出土している。叩石には周囲を強く研磨した小型・棒状の個体（第14図、67・68）がある。浮子はNo.3トレンチ内住居跡（東側）覆土より検出された。1箇所穿孔している。



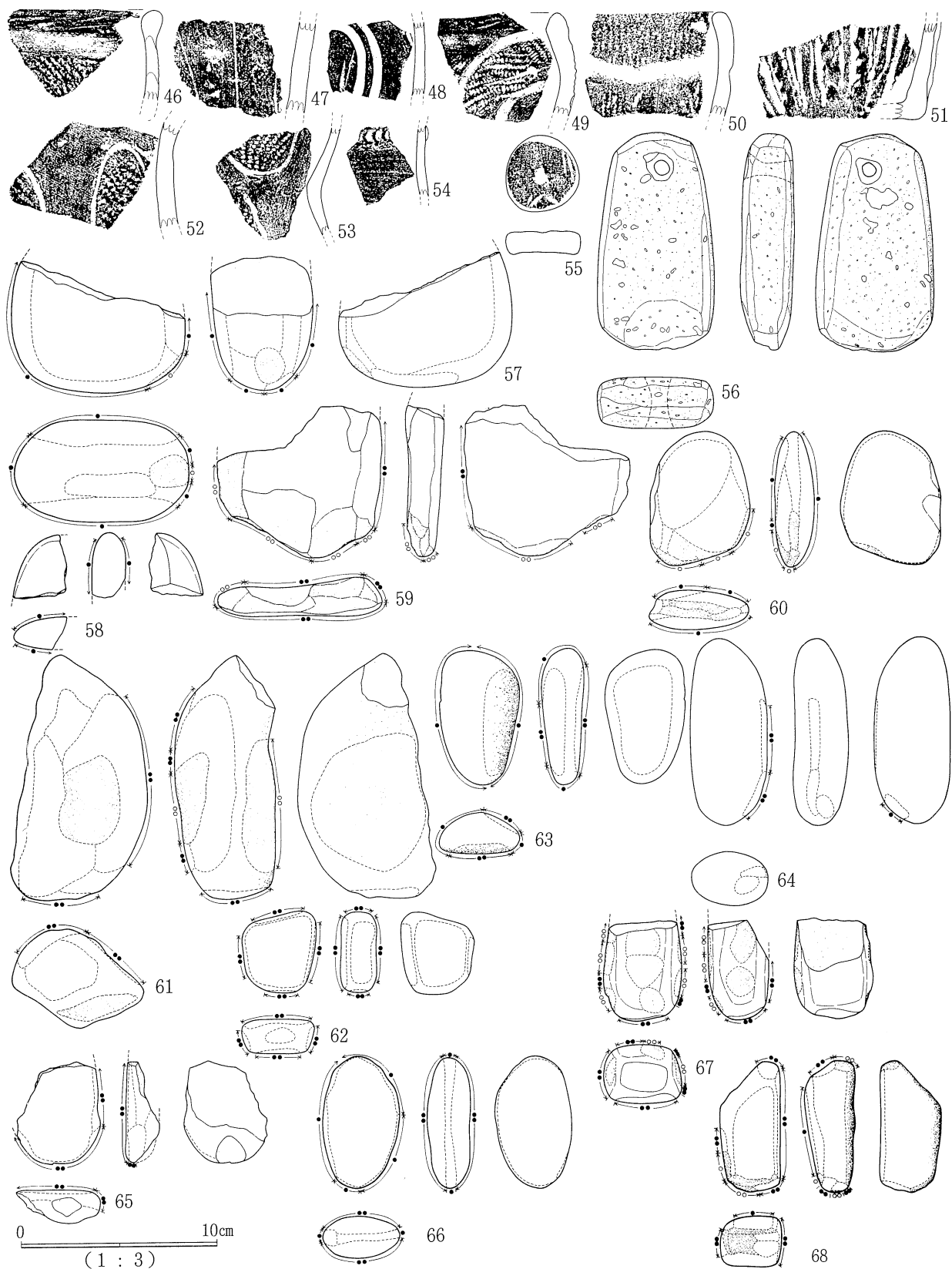
第12図 上高根大作遺跡周辺地形図



第13図 上高根大作遺跡全体図及び出土遺物



第14図 上高根大作遺跡出土遺物



No.1 トレンチ (2、3、4、22、29、59、67)、No.1 トレンチ内住居跡 (25)、No.2 トレンチ (5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、
 18、23、24、26、27、28、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40、41、43、44、55、57、60、61、62、63、64、65、66、68)、
 No.3 トレンチ (42、45、47、48、54、56)、No.4 トレンチ (16、17、19、20、21、46、48、50、51、52、53、58)

第15図 上高根大作遺跡出土遺物

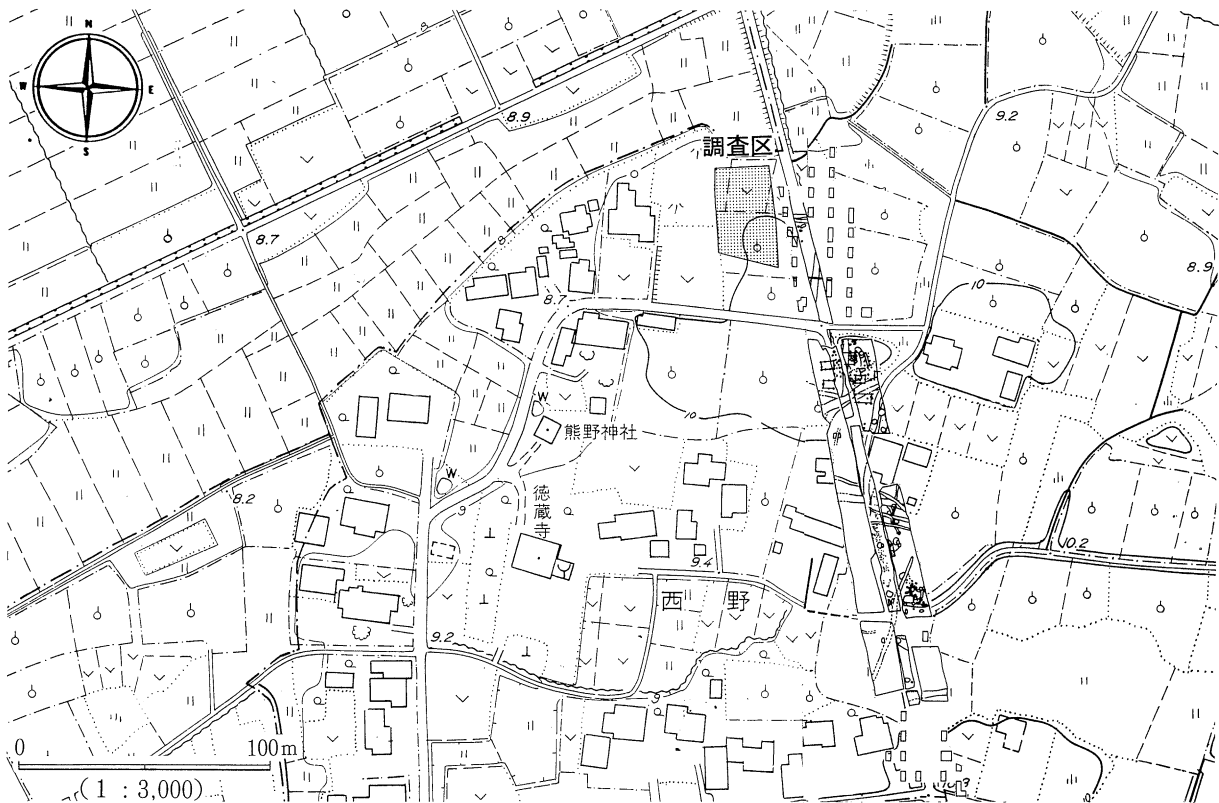
IV 西野下田遺跡

(1) 遺 構

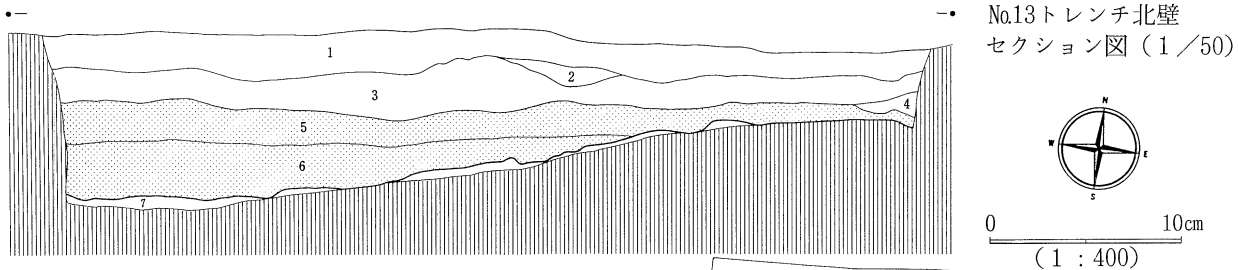
調査の結果、7世紀代と思われる住居跡1軒、土壇1基、ピット9基、溝状遺構2条、中・近世溝5条、土坑1基が確認された。ピット群については掘立柱建物跡である可能性が高いが、検出面積の関係から柱配列を確認するには至らなかった。住居との新旧は不明。規模も小さく官衙関連の遺構ではないかと思われる。大溝は調査区東側を南北に縦断している。落ち込みもなだらかで明瞭な掘り方を認められない。従って自然流路の可能性もあるが、覆土が全体に粘性の強い黒色土で、鉄分や流砂が確認できないことから、それと断定することは困難である。しかしながら粘性強い黒色土（第16図、No.13トレンチセクションにトーンで示す）の堆積は、速い流れを伴わない、ある程度恒常的な溜水の存在を示すものと考えられる。水場として遺構内に緩やかな流れを誘致した可能性も指摘しうるが、現段階で遺構の性格は不明である。なお、黒色土中より多くの須恵器甕片が検出されている。

(2) 遺 物

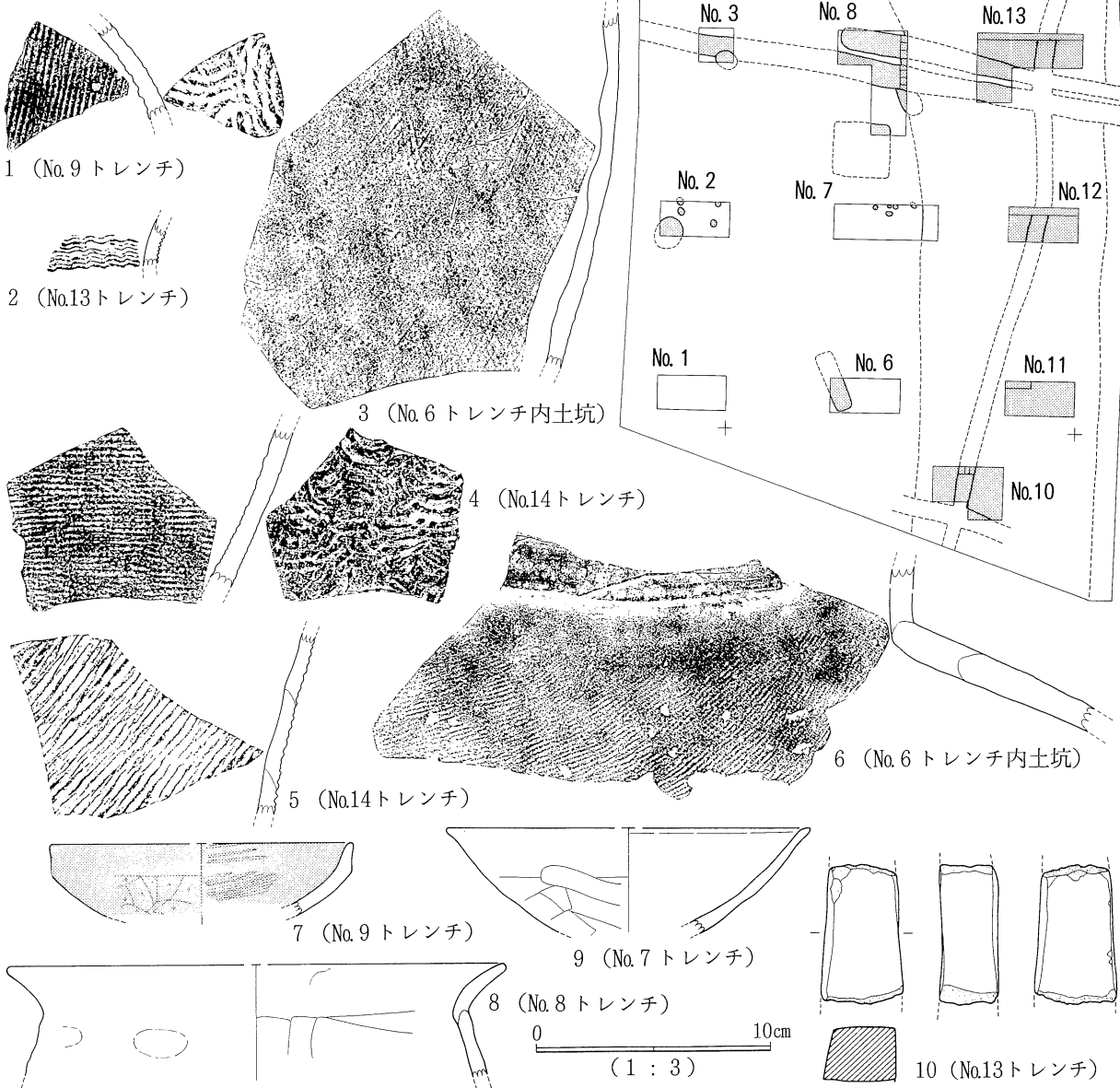
出土遺物は遺構に確実に伴うものが少なく、年代を押さえることも困難である。大溝内黒色粘質土中から、須恵器甕片と共に7世紀前半期の土師器環が検出された。出土遺物の年代も大体この時期に集中するようで、土壇や住居跡も7世紀前半頃のものとして解釈している。全体的に須恵器甕が出土量の殆どを占める。須恵器甕は西野遺跡でも多数検出されており、同様の様相を呈するものと思われる。



第16図 西野下田遺跡周辺地形図（調査区西・西南側は県センターの前掲報告書による）



第17図セクション図
土層説明 (No.13トレンチ北壁。トーンは黒色土層)
1. 暗灰砂。現表土。
2. 極暗灰砂。近世溝状遺構覆土。
3. やや鉄分含む暗灰砂。
4. 極暗灰粘質土。焼土粒若干含む。
5. 黒灰粘質土。
6. 地山黄色粘土層。



第17図 西野下田遺跡遺構配置図・出土遺物実測図

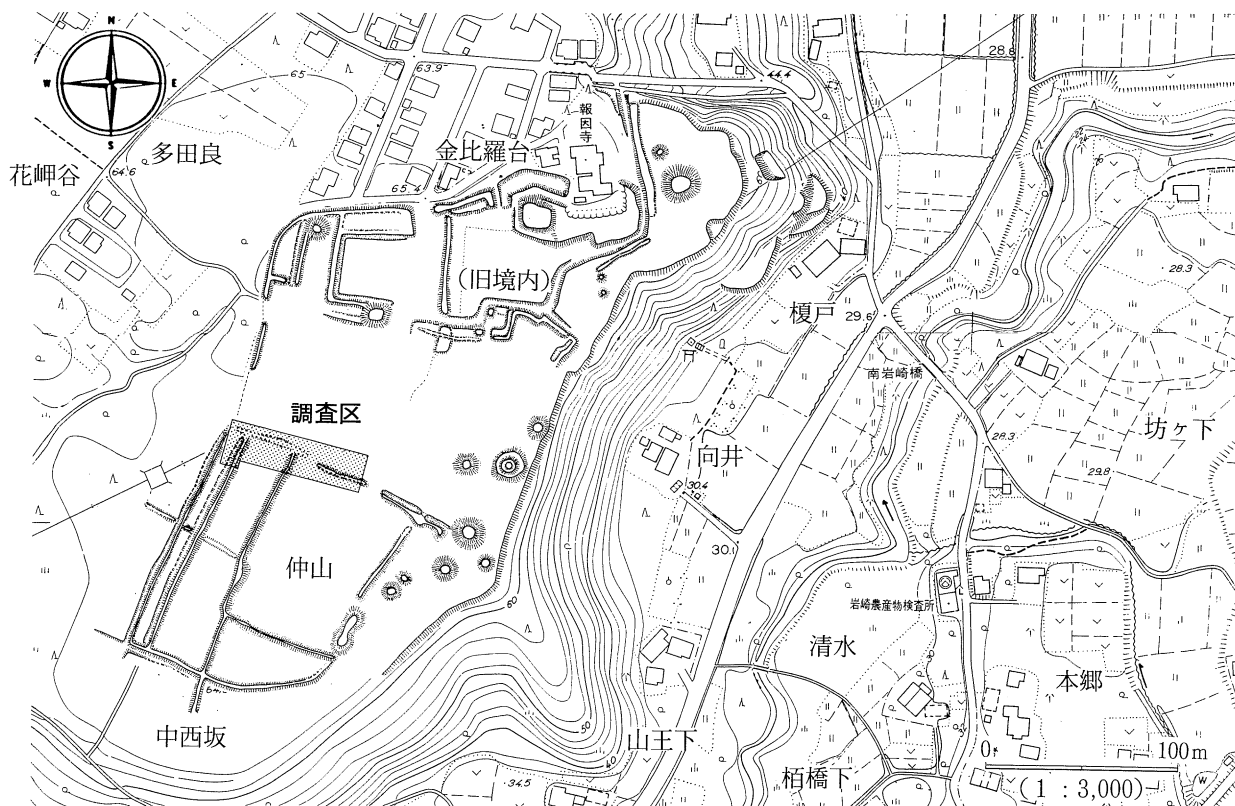
V 南岩崎仲山遺跡

(1) 遺 構

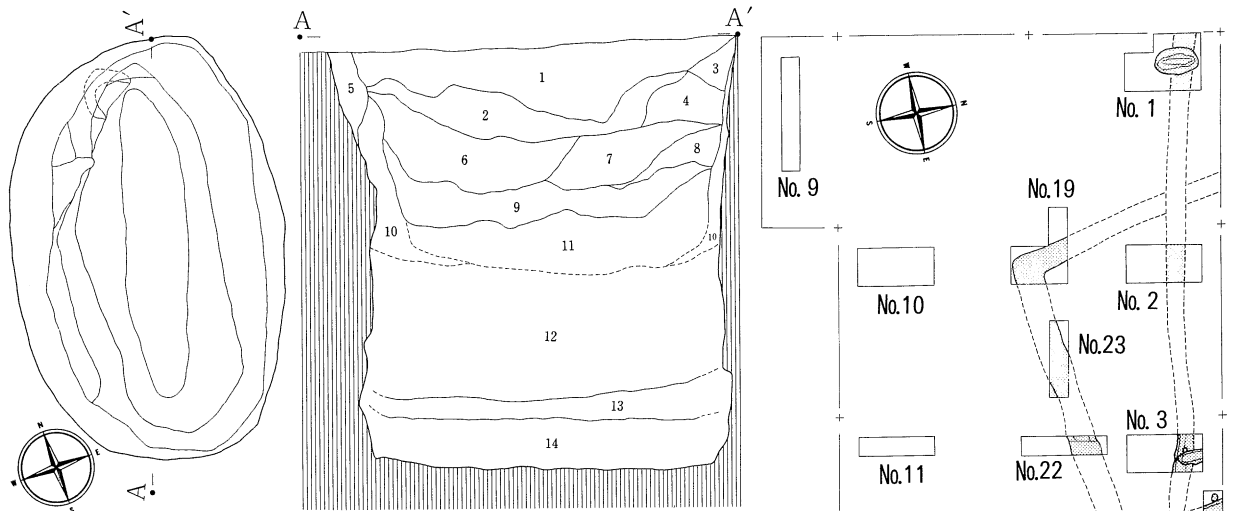
調査の結果、縄文時代陥し穴状遺構1基、7世紀の方形周溝状遺構1基、中世の溝状遺構2条、時期不明道跡1条が検出された。縄文の陥し穴状遺構は底面に施設を伴わず、断面漏斗状を呈するものである。方形周溝状遺構は外法寸法17m、内法寸法14mを測る。掘り方はしっかりしており、断面逆台形である。調査範囲からは1基のみの確認に止まったが、周辺にも同様の遺構が存在する可能性は強く、台地上に広く墓域を構成するものと思われる。周辺に展開する報恩寺古墳群との関連を考察する必要があるだろう。一方、中世の溝状遺構はNo.3・No.20トレンチにおいて南北方向に検出されたが、20トレンチ内遺構は埋没後道として使われたようで、2条の硬質面を残す。中世報恩寺墓域の参道であったのかもしれない。なお、これら中世遺構は、現在地表面に残存する土手や地筆に全く伴っていない。これに対し、新しく東西に造られた道跡は土手に沿って走る。道跡および土手がいつ築かれたは不明であるが、少なくとも先の中世遺構より新しく、近世あたりのものと考えられる。土手は高さ30cmほどで台地上を方形・長方形に区画するが、意図は不明である。報恩寺境内周辺に残る土手は、新旧を認めたとしても基本的に同様の形態で、現状において城館に伴うものと考えがたい。

(2) 遺 物

遺物は殆ど無いのが特徴で、わずかに現表土中より縄文時代早期・弥生時代後期の土器片が数点出土したにすぎない。この他、方形周溝状遺構から7世紀代の土師器片が若干検出されたが、いずれも小片のため図示しなかった。No.20トレンチ内中世溝状遺構からは北宋銭が11点検出された。



第18図 南岩崎仲山遺跡周辺地形図・報恩寺（南岩崎岩）縄張り図

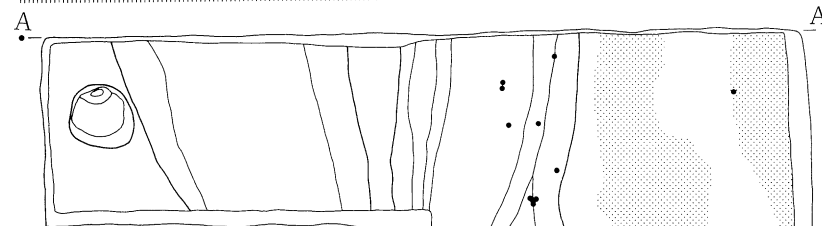
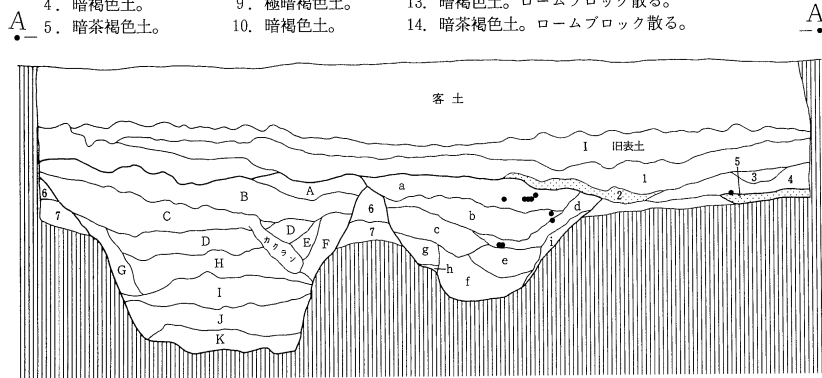


No. 1 トレンチ内陥し穴跡平面・セクション図 (1 : 40)

第19図セクション図

No. 1 トレンチ内陥し穴土層説明 (A - A')

- | | | |
|-----------|-----------|----------------------------------|
| 1. 暗褐色土。 | 6. 極暗褐色土。 | 11. 暗茶褐色土。 |
| 2. 極暗褐色土。 | 7. 黒褐色土。 | 12. 1 cm~5 cm大ロームブロック多く含んだ暗茶褐色土。 |
| 3. 暗茶褐色土。 | 8. 茶褐色土。 | |
| 4. 暗褐色土。 | 9. 極暗褐色土。 | 13. 暗褐色土。ロームブロック散る。 |
| 5. 暗茶褐色土。 | 10. 暗褐色土。 | 14. 暗茶褐色土。ロームブロック散る。 |



No. 20 トレンチ平面図・北壁セクション図

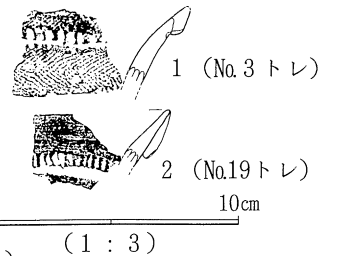
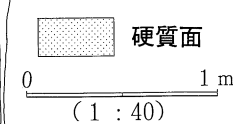
No. 20 トレンチ北壁土層説明 (A - A')

1. 有機質性強い暗褐色土。
 2. 暗褐色土。硬化する。
 3. 暗褐色土。硬化する。
 4. 暗褐色土。
 5. 暗褐色土。硬化する。
 6. 暗褐色土。
 7. ローム漸位層。
- 方形周溝状遺溝覆土
- A. 極暗褐色土。
 - B. 暗褐色土。1 mm大ロームブロック少量散る。
 - C. 暗褐色土。
 - D. 暗褐色土。
 - E. 暗茶褐色土。
 - F. 茶褐色土。
 - G. 暗茶褐色土。
 - H. 暗茶褐色土。部分的に褐色味強い。
 - I. 極暗褐色土。
 - J. 暗褐色土。
 - K. 3~5 cm大ロームブロック主体層。

- 中世溝状遺溝覆土
- a. 極暗褐色土。
 - b. 極暗褐色土。
 - c. 黒褐色土。
 - d. 暗褐色土。
 - e. 黒褐色土。
 - f. 極めて有機質性強い黒褐色土。
 - g. 極暗褐色土。筋状に褐色土粒堆積する。
 - h. 茶褐色土。
 - i. 暗茶褐色土。

遺溝配置図 (1 : 400)

No. 20 トレンチ内溝状遺構・方形周溝状遺構平面・セクション図



(中世輸入銭検出位置を点示する)

第19図 南岩崎仲山遺跡遺溝配置図



潤井戸内野遺跡



1号遺構



2号遺構



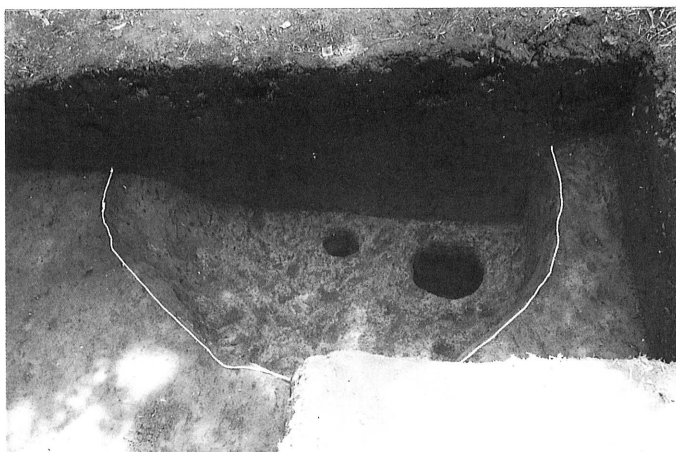
No.9 トレンチ内対空砲陣地跡



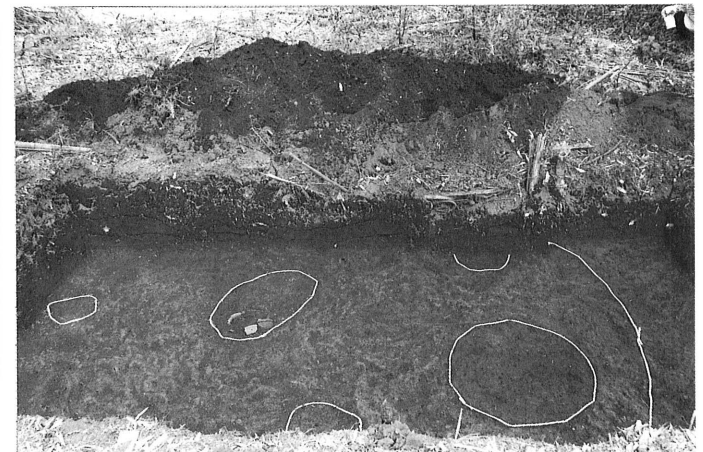
鶴舞子来遺跡 (No.9 トレンチ)



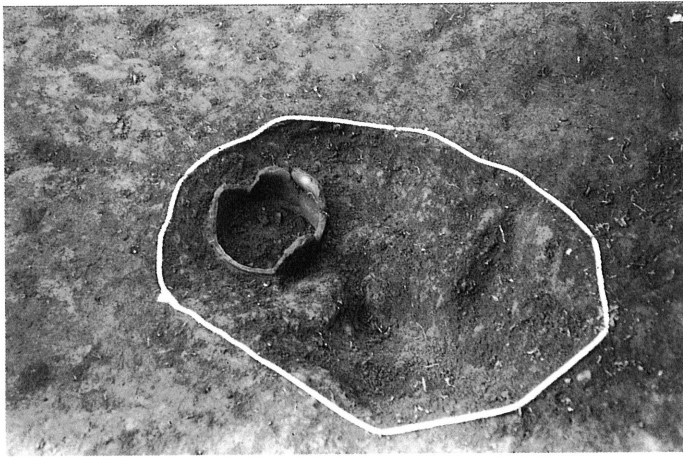
小竪穴状遺構内遺物出土状況



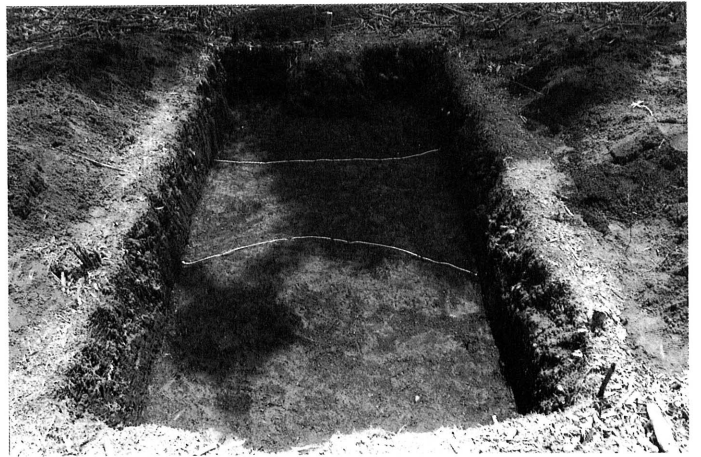
小竪穴状遺構全景



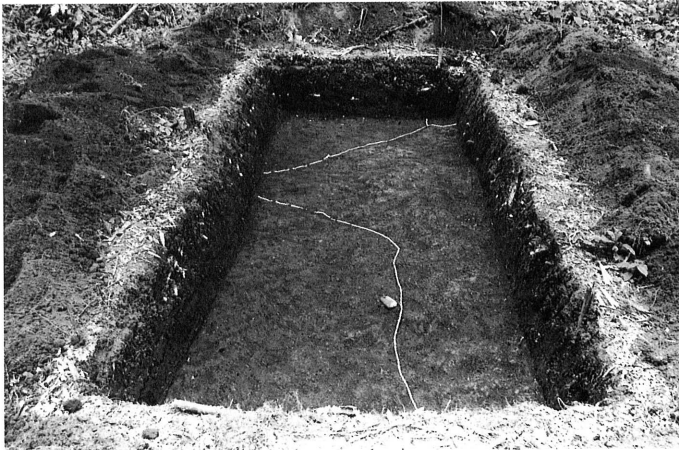
上高根大作遺跡 (No.1 トレンチ住居全景)



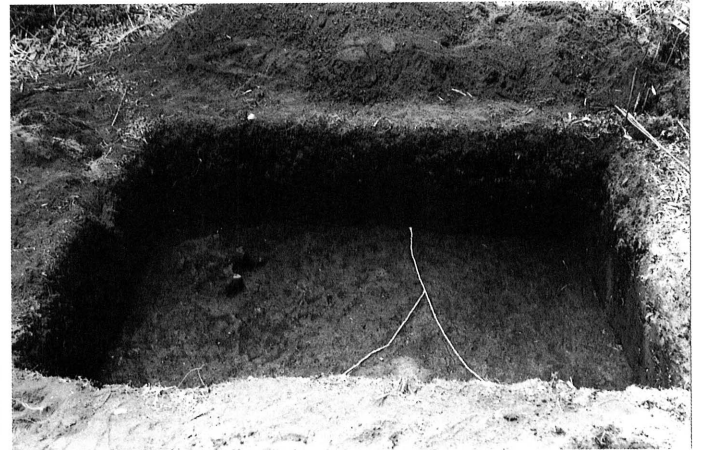
No. 1 トレンチ住居炉跡



No. 2 トレンチ遺構確認状況 (東から)



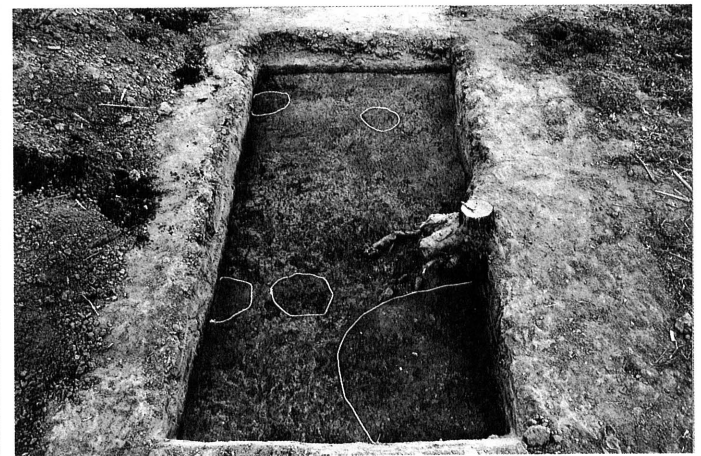
No. 3 トレンチ遺構確認状況 (東から)



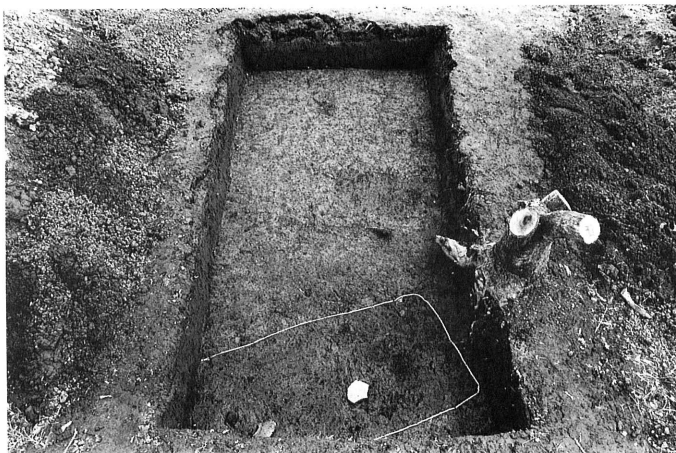
No. 4 トレンチ遺構確認状況 (南から)



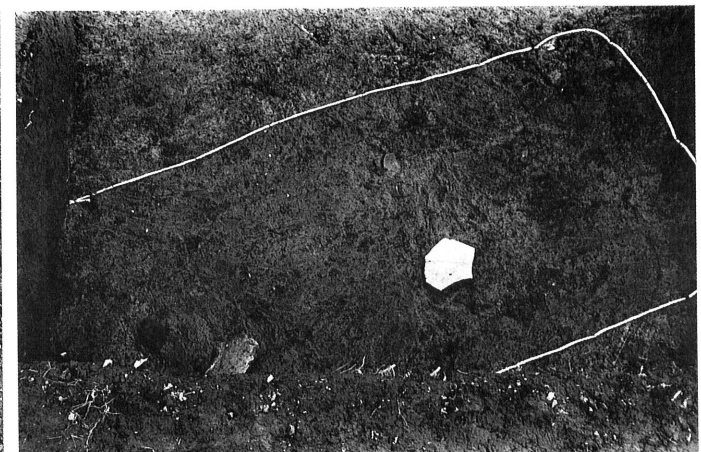
西野下田遺跡 (全景)



No. 2 トレンチピット群確認状況 (西から)



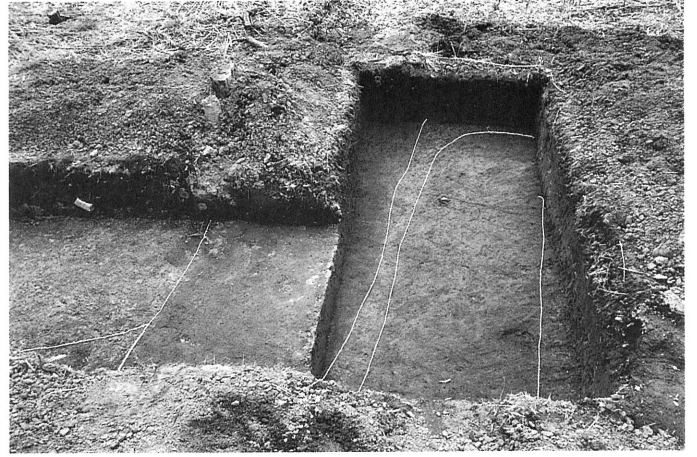
No. 6 トレンチ土壌確認状況 (西から)



No. 6 トレンチ土壌内遺物出土状況



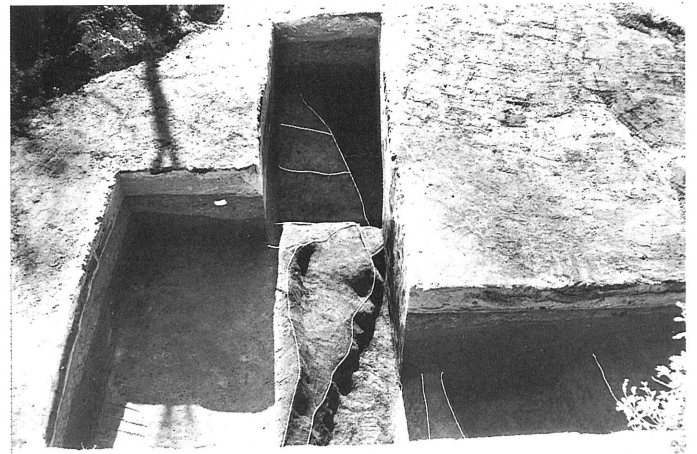
No. 7 トレンチピット群確認状況（西から）



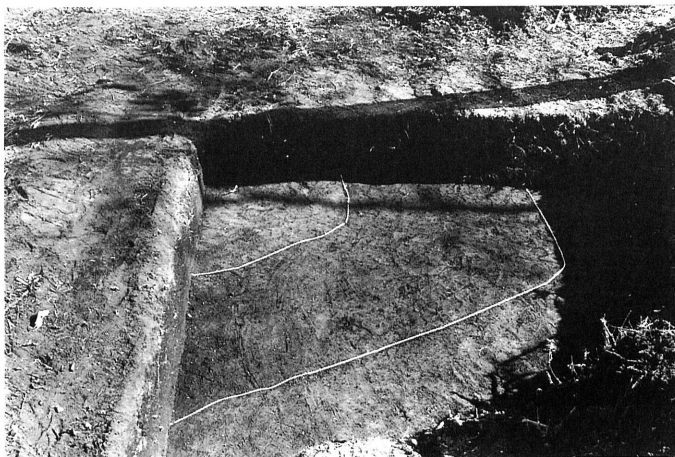
No. 8 トレンチ溝状遺溝確認状況（東から）



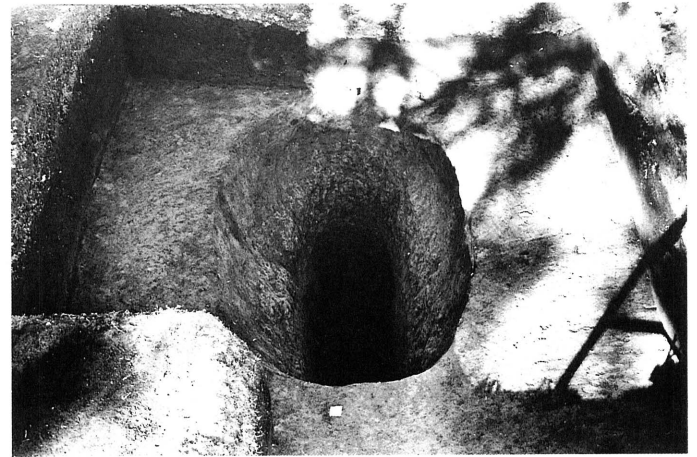
南岩崎仲山遺跡（全景）



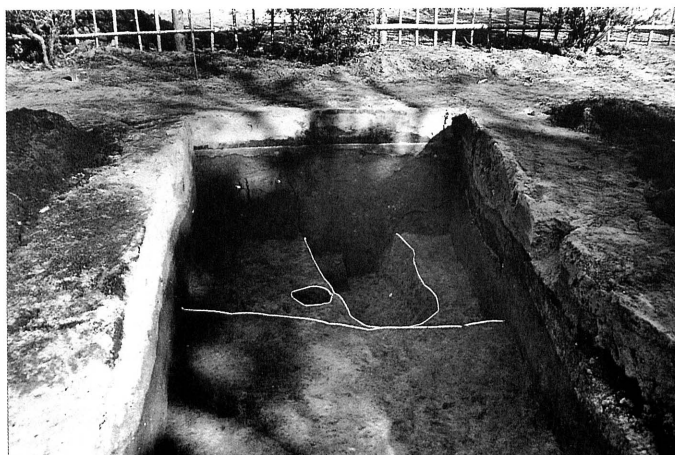
No.20 トレンチ方形周溝状遺構・中世溝（北から）



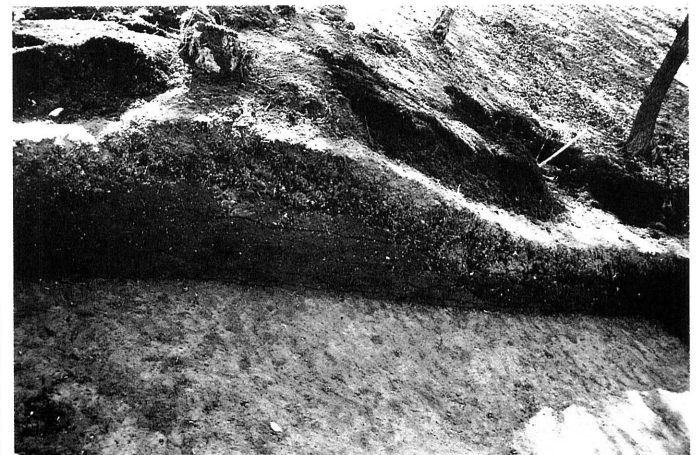
No.19 トレンチ方形周溝状遺溝（西から）



No. 1 トレンチ陥し穴状遺構検出状況（南から）

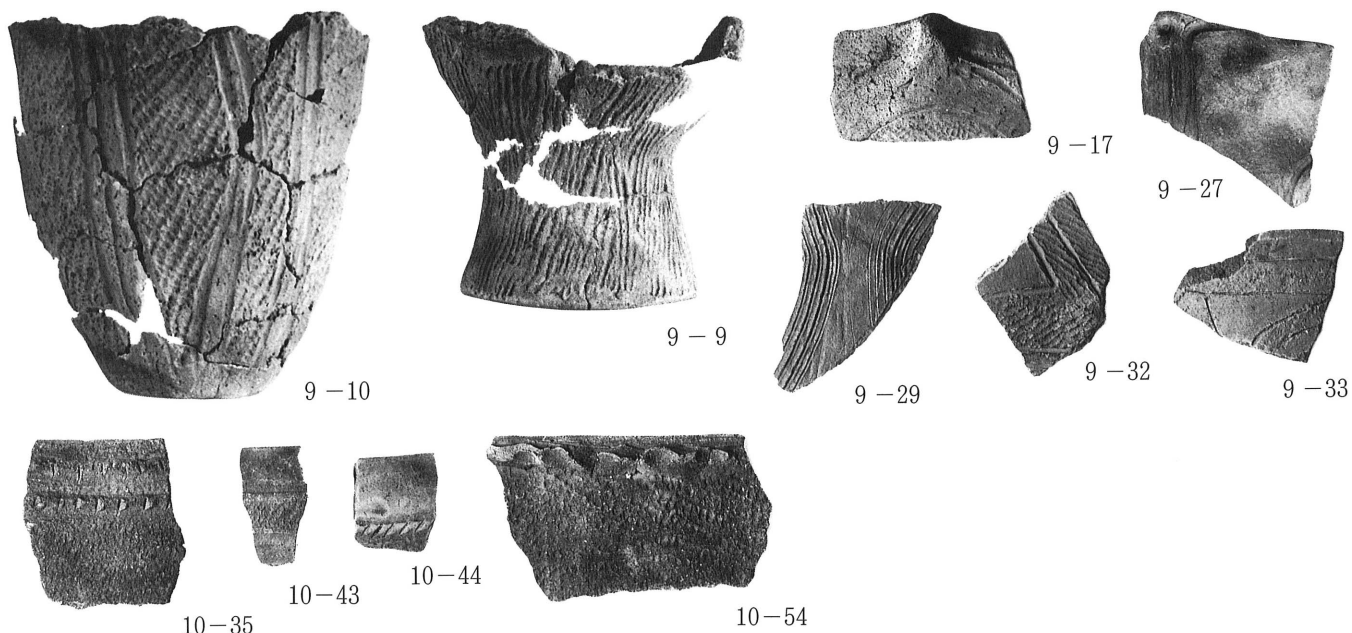


No. 3 トレンチ中世溝状遺溝検出状況

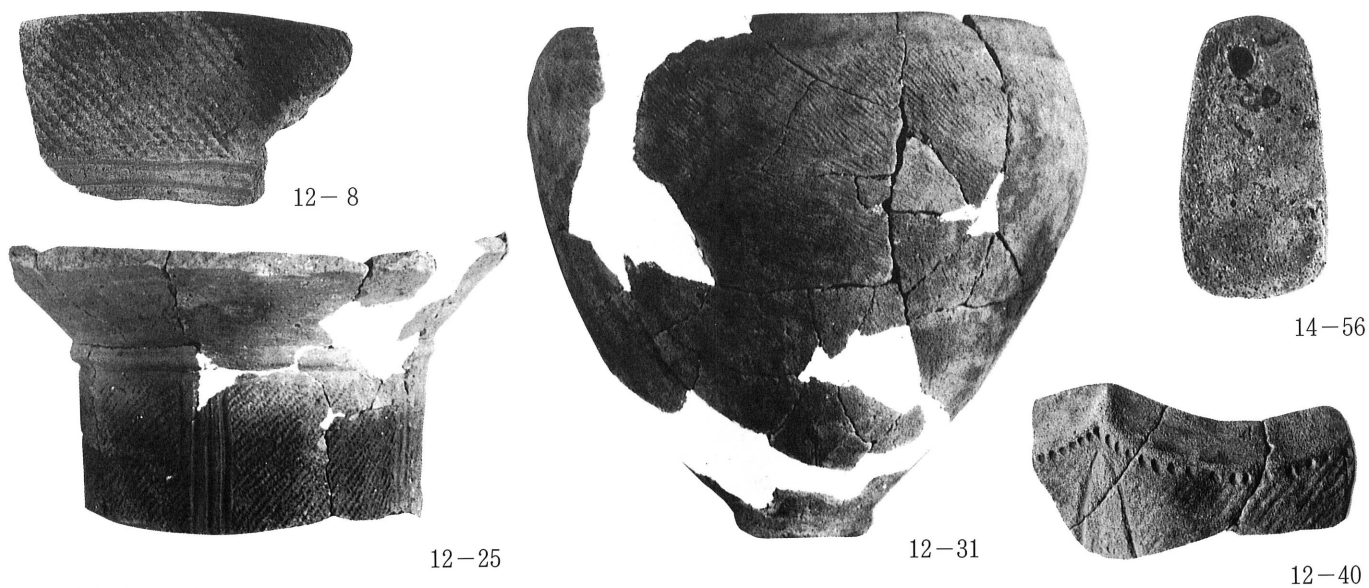


No.12 トレンチ（土手）土層断面（北から）

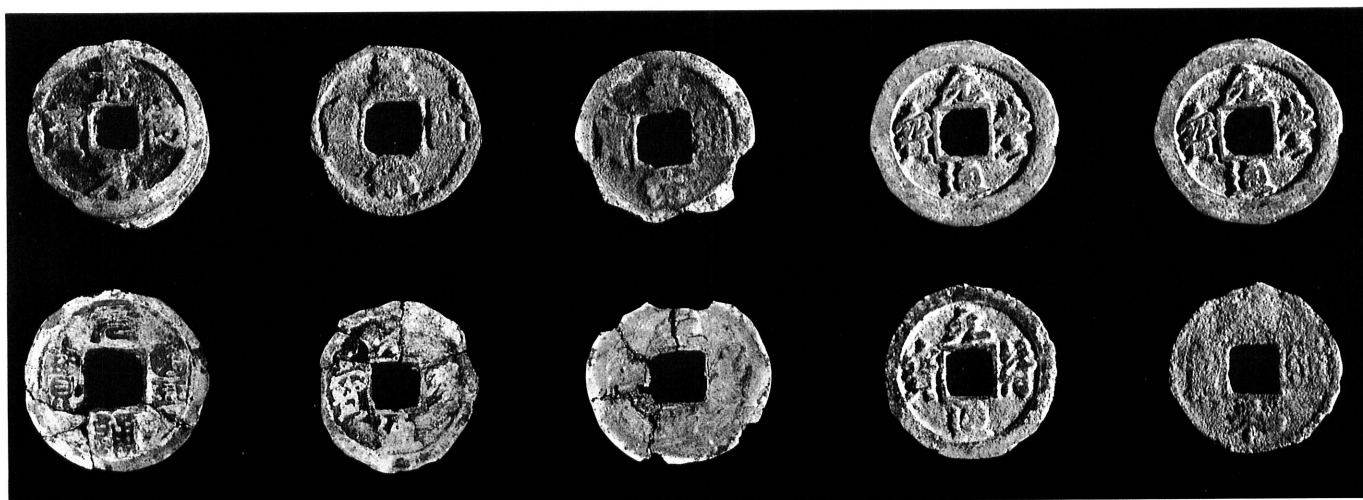
鶴舞子来遺跡



上高根大作遺跡



南岩崎仲山遺跡



報 告 書 抄 録

ふりがな	うるいどうちのいせき つるまいねごろいせき かみたかねおおさくいせき にしのしもだいせき みなみいわさきなかやまいせき							
書名	潤井戸内野遺跡・鶴舞子来遺跡・上高根大作遺跡・西野下田遺跡・南岩崎仲山遺跡							
副書名	平成7年度市原市内遺跡発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番								
編著者名	櫻井 敦史							
編集機関	財団法人市原市文化財センター							
所在地	㊦290 千葉県市原市能満1, 489番地				TEL 0436-41-9000			
発行年月日	西暦 1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うるいどうちのいせき 潤井戸内野遺跡	ちばけんいちほらうるいど 千葉県市原市潤井戸 おざうち 字内野	12219	セ-207	35度 30分 57秒	140度 9分 67秒	19950710- 19950718	152	給油所建設に伴う埋蔵文化財調査
つるまいねごろいせき 鶴舞子来遺跡	ちばけんいちほらつるまい 千葉県市原市鶴舞 あざねごろ 字子来	12219	12-93 セ-208	35度 22分 35秒	141度 0分 77秒	19950719- 19950727	52	移動通信基地建設に伴う埋蔵文化財調査
かみたかねおおさくいせき 上高根大作遺跡	ちばけんいちほらかみたかね 千葉県市原市上高根 あざねごろ 字大作	12219	セ-209	35度 25分 7秒	140度 6分 10秒	19950728- 19950803	30	仮設道路建設に伴う埋蔵文化財調査
にしのしもだいせき 西野下田遺跡	ちばけんいちほらしおおあざ 千葉県市原市大字 にしのしもだ 西野下田	12219	22-463 セ-211	35度 28分 49秒	140度 6分 30秒	19950911- 19950922	128	ドライブイン建設に伴う埋蔵文化財調査
みなみいわさきなかやまいせき 南岩崎仲山遺跡	ちばけんいちほらしみなみいわさき 千葉県市原市南岩崎 あざなかやま 字仲山	12219	15-127 セ-217	35度 24分 51秒	140度 6分 37秒	19951121- 19951214	160	墓地造成に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺跡		特記事項	
潤井戸内野遺跡	包蔵地	縄文時代	陥し穴跡 2基		縄文土器		戦時中の高射砲陣地	
鶴舞子来遺跡	包蔵地	縄文時代	小竪穴状遺構 1基		縄文土器		縄文中・後期集落の縁辺部か	
上高根大作遺跡	集落	縄文時代	竪穴式住居跡 5軒 小竪穴状遺構 2基 土坑 2基		縄文土器		縄中・後期の集落	
西野下田遺跡	包蔵地	古墳時代	竪穴住居跡 1軒 土壇 1基 溝状遺構 7条		須恵器・土師器			
南岩崎仲山遺跡	墓域	縄文時代 古墳時代 中世	方形溝状遺構 1基 陥し穴 1基 溝状遺構 3条		土師器・弥生土器		報恩寺古墳群に包括される	

平成7年度市原市内遺跡発掘調査報告

平成8年3月23日 印刷

平成8年3月29日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

市原市能満 1,489 番地

発行 千葉県市原市教育委員会

市原市惣社1,040-1 番地

印刷 三陽工業株式会社

市原市五井5,510-1 番地